北九州市立文学館紀要
第１号

2018（平成30）年3月

北九州市立文学館

創刊のあいさつ

館長　今川　英子

文学館開設時からの念願であった「北九州市立文学館紀要」を創刊する。

当文学館は、二〇〇六年十一月に開館以来、地元ゆかりの文学者の資料を収集・保存、調査・研究を行い、その成果をまちの記憶として次世代へ継承することを主眼に、展覧会や図録の作成、講演会、文学館文庫刊行などを通して発信、普及に努めてきた。

文学資料を収集するところからはじまり、展覧会や図録作成なども含めて、地域の文学研究は手探りからの出発であり、まずは文学館としての体をなすためにひた走る状況であった。そのために、スタッフによる紀要執筆までは時間的にも精神的にも余裕がなかった。

開館一〇年を経て、開館時、約四万点であった収蔵資料も約十二万点となった。地域の文学研究も進み、徐々に体系化しつつある。スタッフもそれぞれに実力を付け、調査・研究における成果も高い評価を受けつつある。

そこで収蔵する貴重な資料の中から、未公表資料の翻刻や報告、収蔵資料に基づいた研究論文や研究ノートなどを掲載する紀要を、年一回刊行することとした。

本紀要が文学館活動の一端として、文学研究の一助となれば幸いである。

杉田久女「所感」（「俳句月刊」一九三三・三）
―廃刊の心地をきせしもの

中西　由紀子

1　はじめに

大正時代から昭和の初期にかけ、すぐれた俳句と評論を遺した杉田久女（一八九〇―一九四六）は、一九三二（昭和7）年主宰誌「花衣」を創刊する。自ら編集、挿画、事務一切を手掛け、美しい雑誌を刊行した。増刷を出したというほど世評も高かったが、雑誌はわずか五号で終刊する。

六ページしかない終刊号には、「廃刊について」という文章が掲載され、次のような理由が示された。

> 此度私の健康と家庭の都合により、廃刊いたす事と相成りました。
>
> （中略）
>
> 私もまだ〳〵力足らず二人の子の母としても、又滞りがちの家庭の事をも、も少し忠実にして見たく存じて居ります。

昭和「七年八月廿八日」の日付である。

好調だった主宰誌をなぜ突如、自らの手で閉じたのか。具体的な要因を探る議論がなされてきた。

①　健康上の問題

久女の長女・石昌子はこの頃、久女が持病の子宮筋腫を悪化させていたことを述べる。「かういふ種類の病気について、夫に相談するには、遥かに夫婦共隔つて居り、治療もうけずに過ぎてしまつた」とし、「この頃一月余り病臥」したという[1]。また、当時の久女の言葉を「雑務が多くて、こんなに事務に追われていたら、肝心な句作の時間も、心の余裕もなくなってしまって、作品が低下してしまう」[2]と記している。体調不良の中、雑誌を刊行する労力が身体的、精神的に重い負担となっていた。

②　「玉藻」への遠慮

「花衣」の発刊に二年先立つ一九三〇年、高浜虚子の二女・星野立子が「玉藻」を創刊した。女性中心の俳句雑誌というコンセプトも重なり、「花衣」は「玉藻」のライバル誌と目されたのではないか。立子の前途に影を落とす存在として、この頃から虚子は久女を忌避しはじめたと増田連は指摘する[3]。

また、石昌子は当時、久女から「虚子先生もお嬢様の立子さんが『玉藻』という雑誌を始めていられるから、私があんまりやり過ぎるべきではない。自分の余力があったら、向こうをご援助すればいい」と聞いたことを述べている[4]。

③「天の川」の月評

久女はこの年（一九三二年）、「ホトトギス」七月号で初めての巻頭を得た。〈無憂華の木蔭はいづこ仏生会〉など五句で、これらの句は「花衣」三号（一九三二・六）「無憂樹のかげ」にも挙げられている。当時、福岡市で刊行されていた俳誌「天の川」（吉岡禅寺洞主宰）八月号が、この巻頭を合評で取り上げ、否定的な評言を掲載した。評者には、のち小倉で医院を開業する横山白虹や久女の若い句友の神崎縷々がいた。合評の内容と、その翌月に掲載された久女の反論「楊貴妃桜の句評に就て」（「天の川」九月号）への展開は坂本宮尾『真実の久女―悲劇の天才俳人　1890-1946』（藤原書店、二〇一六・一〇）に詳しい。

その上で坂本は、八月一六日の日付を持つ久女の縷々宛て書簡「我性格を恥ぢて」（北九州市立文学館所蔵）に注目する。前掲「楊貴妃桜の句評に就て」の日付は八月一〇日。その執筆後だろうか、久女は縷々と衝突し「自分の曲りくねつた、ひがみ易い性格、怒り易く愚かしい欠点だらけの私を、まざ〳〵と面前につきつけられた」と始まる手紙を書いた。「私の性格がつねに人々をそむかせ、魂をきづつけ、うるさがらせてゐる」などの言葉がある。坂本は、信頼する神崎縷々とのこの齟齬が引き金となり、軋轢に疲れ思いつめた久女は八月二八日の廃刊宣言に至ったと論じている。

①も②も雑誌刊行をめぐる摩擦だったのだろう。内圧が高まった中、「引き金」が引かれたとする坂本の考証はスリリングで、説得力を持つ。

「花衣」を廃刊した翌年（一九三三年）二月から、断続的に記された久女の日記が残っている。「俳句手記」と記された革張りの手帳である（かごしま近代文学館所蔵）。『杉田久女全集』第二巻（立風書房、一九八九・八　※以下、全集と表記）には「日記抄2（昭和八年）」としてその内容が抄録されている。うち、「三月十日」に次のような記載がある。

きせしもの也。

この「俳句月刊三月号」の文章は全集に収録がない。公刊された文章ではあるが、「廃刊の心地」を記した、との明記があり、「花衣」廃刊をめぐるテキストとして意味あるものと考えるため、次に全文を紹介する。なお、使用した冊子は俳句文学館の蔵書である。引用にあたり、漢字は新字体に改めた。傍線は引用者による。（以下、同）

2　杉田久女「所感」（「俳句月刊」一九三三・三）全文

御誌新年号でより江夫人の久女論を拝見し、まづ何より私が日頃女流俳人中第一に尊敬する夫人の執筆御批評をありがたく感じた。

たゞ文中「ずいぶん華かなるべくして事実は反対に益々淋しく孤独な久女さんです」との御記事に対しては、私は受難のクリストが、もろ〳〵の淋しさにうちひしがれつゝもいよ〳〵益々大地の如き平静さと確固たる信念の喜びにうちふるえる如き静かなほゝえみを此頃感じるのである。廃刊後私をとりまく二十何人かの旧花衣会員達の涙のこぼれる様な優しいまごころにつゝまれて生きてゐる私は、決して今は孤独でない事を附記する。

廃刊については、私自身の欠点の多い性格がすべての原因を自動的にかもし出してゐるので、静かに世相を観じ自己を内省し、深般若に思ひをひそめれば、雲影をかきけす波も風も皆私自身、我心からつくり出した疑心暗鬼に過ぎなかつた事を此頃益々知る事が出来た。廃刊の真因は私の心中に大きな無明の闇がよこたはつてゐた事をこゝに明示しておく。

かゝる自己の性格からくる寂寞感も凡愚の悩みからも、今は解放された私はもつと明朗な善女となりたいと念願しつゝ、しづかにすべての人に愛と光明とで呼びかけ親しみたい私である。

俳句に於ける主義主張はよしどんなに異らうと、人間相愛、地上の平和を私はほしい。芸術上の主義は堂々と紙上でしのぎをけづろうと、俳人同志として、道でめぐりあへば、寛容とほゝえみとで握手したい。

俳壇全体が只自己の立場と主張とで、醜いこぜりあひやあらひろひで下品にせめぎあはず、互に人間とし

ての欠点はゆるし相手を尊敬しつゝ、主義の上では、妥協性をもたず、孤どくの境地によし泣かうともあくまで主義に殉じたい。

私は、女手で小さい雑誌を支えきれず、サラリと投げ出してしまつた事には何の悔もない。

私は只前進する。

そして私自身を今は少しも不幸ともあはれな孤どくな気の毒な久女とも思はず、我運命をとほし此身の欠かんをとほして、昔日花衣創刊に際し世間からお受した厚い御友情に必らず報いまつる日のある事を信じる。目下は、ひたすら自己の不明と微力を内省し、しばし世上との一際の交渉も各俳誌からの厚い御友情をも断ちきつて、しづかに書斎にたてこもりたく思つてます。

廃刊当時私の心持を明示しなかつた為め却つて世上に誤解を流布され、或人々にも迷惑かけてゐる事をいかんに思ひ、貴重な紙面を拝借して私の心持丈を明示して置く次第です。

御親切なより江夫人の激励にこゝろから感謝申上げてゐます。

（一月二十日記）

3　内容について

「より江夫人の久女論」とは、同じ「俳句月刊」の一九三三（昭和8）年一月号に掲載された久保より江「杉田久女さんのこと」[5]。石昌子『いのち曼陀羅』（東京美術、一九九六・七）に、ほぼ全文が紹介されている。久女が反応したのは自らも引用しているように、次のような部分についてである。

指導者としても非常に御熱心だと聞きますが、熱心あまりあつて思はぬ誤解を招くうらみもあるらしい。

（中略）

ホトトギスの同人、花ごろもの主幹各雑誌の選者等々ずゐぶん華やかなるべくして事実は反対に益々淋しく孤独の久女さんです。これはあまりに秀でた才能の故の受難もありませうが、一つはその俳人らしくない性格――変な形容ですが一寸適当な言葉が見当りません――つまり万事に淡々としてはゐられないところに原因があるのではないでせうか。

続いて、より江の文章には「充分ネバリ強い久女さんが折角の雑誌を未練気もなく何故捨てゝおしまひになつたか、それに就ての悉しいお手紙もいたゞきましたが、こゝでは触れません。唯お気の毒なかたゞと思つてゐます。」とあり、久女から廃刊について詳しい説明を受けたことを示している。残念ながら、久女の書簡は現存するのか明らかでないが、より江が竹下しづの女に宛てた書簡（一九三二年九月一七日付）に次のようなものがある。

（前略）
花ごろもは廃刊になりました。経済上の為ではなく大分こんがらがつた訳があるらしい。[6]

久女はより江に「こんがらがつた訳」を訴えたのだろうか。いずれにしても、半年足らずを経て久女は廃刊の「真因」を、自らの「疑心暗鬼」がもたらした「無明の闇」にとらわれたため、としている。

廃刊当時、「花衣」の会員だった福田無声女（俳人・福田蓼汀の母）に送った久女の手紙が知られている。そこには「私が女のくせに少々やりすぎました」「花衣をいたせば益々せけんからもきらはれ到底一人でこの上いたして見てもだめです」「何事も我身の愚ゆえと不才微力をかへり見ずやり過ぎた為めです」など記されていたという[7]。「やりすぎ」は前述のように石昌子に語った言葉（「立子さんが『玉藻』という雑誌を始めていられるから、私があんまりやり過ぎるべきではない」）にもあった。

「無明の闇」の正体は、自分の「やりすぎ」が周囲に疎まれ、孤立を招いているという自意識だったのだろう。

誤解の流布により「迷惑かけてゐる」人々というのは、やはり縷々をはじめとする「天の川」の合評に関わった人たちと推測する。増田連は門司で発行されていた俳誌「数の子」と「天の川」の応酬を紹介し、当時地元で「花衣」の廃刊は「天の川」の「月評」を原因とする噂があったことを伝えている[8]。

「杉田久女さんのこと」は「雑誌発行などゝいふ面倒な事務的な仕事から離れ、世評なぞに煩はされず俳句也何なり御自身の道をより深く踏みしめていらつしやることを心から祈つてまゐす」と閉じている。久女が人の評価に敏感で心を乱されやすいことを皮肉に表現しているのである。「万事に淡々としてはゐられな

い」「俳人らしくない性格」で「孤独」に陥る「お気の毒なかた」[9]への忠言なのか、スケッチなのか。

どういう経緯でこうした文章が公表されたのかは推測するしかないが、「天の川」で別格の位置を占めていたより江の文章は、個人の見解である以上に、当時の福岡俳壇の空気を語っているように思われる。

今は闇を通り抜け、「凡愚の悩み」から「解放」され、「孤独ではない」と久女はいう。「しづかに書斎にたてこもりた」いという一方で、俳句上の主義が異なる人にも「寛容とほゝえみとで握手したい」「人間としての欠点はゆるし相手を尊敬し」たい、と他者へ手を伸ばす思いには、自分もそうされたい、俳句では対立しても、人としては宥されたい、そのような俳壇であってほしいという願いが打ち付けられているようで心が痛む。

4　「春日遅々」（「俳句月刊」一九三四・五）

石昌子は、同じ「俳句月刊」の一九三四（昭和9）年五月号に掲載された久女の「春日遅々」という文章を、廃刊後の心境をつづったものとして紹介している[10]。この「春日遅々」は、ほぼ同じ内容が全集に「万葉の手古奈とうなひ処女」の題名で掲載されている。以下、「春日遅々」（「俳句月刊」一九三四・五）と「万葉の手古奈とうなひ処女」（全集二巻）の異同を記す[11]。

段落	春日遅々	万葉の手古奈とうなひ処女
2	うなひ処女	うなひ処女
3	しじくしろ黄泉に待たむと、息をもつがせぬ面白さ	ししくしろ黄泉に待たむと、息をもつかせぬ面白さ
7	話は違ふが、廃刊後全国から寄贈される俳句の雑誌は三十余冊。目下雑誌をもたぬ私は、只全国の知己からうける芳情を感謝するのみで何等報いる事もなく、空しく籠り暮す事は誠に心苦しくもあり又嬉しい事でもある。	空しく籠り暮す事は誠に心苦しくもあり又嬉しい事でもある。

11	私の全身どこをきつても、噴き出す血潮は悉くこれ俳句のみ。	なし
12	句はよし拙くとも、私は一生春蘭か白蘭か梅花の気品をもつて……	私は一生春蘭か白蘭か梅花の気品をもつて……
13	願くば蓮の花の其上に曇らぬ月を見るよしもがな	なし

四カ所にわたり「春日遅々」に加筆があるが、どちらも日付は「昭和九年四月八日記」とあり、同じテキストと考える[12]。「万葉の手古奈とうなひ処女」は、はじめ『久女文集』(石昌子編集発行、一九六八・二)に収められ、その後全集に収録された。以上、このたび掲載誌と異同が明らかになったので報告する。

因みにこれら文章の掲載誌「俳句月刊」について、今泉康弘が貴重な記録を残している[13]。今泉によれば、「俳句月刊」は一九三一(昭和6)年二月、素人社から刊行された俳句総合誌。有名な「俳句研究」より三年早く結社に拠らない商業誌として発刊した。創刊から二年ほどは俳人の金児杜鵑花が編集長を務め、入社したばかりの三谷昭が編集を手伝ったという。三谷はこのころ、俳句をまったく知らなかったが、二年後には実質上の編集長となり、自らも俳人となっていく。

「俳句月刊」が創刊されたのは、水原秋桜子が「馬酔木」に「『自然の真』と『文芸上の真』」を発表して「ホトトギス」を去った年にあたる。今泉は「俳句月刊」が「新興俳句の生成において、情報を与え、相互批評をうながすものとして、ある程度の役割を果たした」と指摘している[14]。

久女の「春日遅々」でも、真間の手児奈の「ふくざつな戯曲的かつとうを、誰か優れた連作の形式でどしどし試みたら、ずいぶん面白い」、「俳句も自然描写のみでなく、又煤煙と、機械との響き丈を素材にして新しがらず、日本民族の上古。原始林の壮大さ、すべて原始時代のもつ力強さを現代生活に交流させ」てはどうか、など記される。久女の新興俳句への関心と距離感をうかがわせて興味深い。

ところが一九三四年三月、改造社が「俳句研究」を発刊したことにより、「俳句月刊」は発行部数を激減

させ、同年九月号（八月号休刊）で終刊した。
「春日遅々」掲載はこの激減後である。

《付記》

「春日遅々」の文章中「谷深くさぐる一字は、永遠の芸術境を求める一つの私の心境をうたつた句であり、遠賀の長堤に青すゝきをかきわけかきわけ独り辿りゆく句境涯も、生きゆく闘ひをこめた心の姿である」とある。テキスト中に句の掲示はないが、次の二句を指すと思われる。

谷深く探ぐる一字や梅花節(15)
青すゝき傘にかきわけゆけどゆけど(16)

以前、「谷深く…」の句が掲載された句会誌「かゝり火」三月号の刊行を一九三三年と推定した(17)。しかし、この句は一九三四年「ホトトギス」四月号で「雑詠」に入選している。

「春日遅々」の執筆時期からも同誌発行は一九三四年三月の錯誤と考える。お詫びして訂正します。

（なかにし　ゆきこ　学芸員）

【注記】

(1) 石昌子「母久女の思ひ出」（『杉田久女句集』角川書店、一九五二・一〇）
(2) 石昌子『杉田久女』（東門書屋、一九八三・七）
(3) 増田連『久女〈探索〉〈付〉久女未収録俳句拾遺』（櫻の森通信社、二〇一四・一二）
(4) 前掲『杉田久女』
(5) 引用は神奈川近代文学館蔵本より。
(6) 和泉修子「竹下しづの女書簡」（『福岡市総合図書館研究紀要』2、二〇〇一・三）
(7) 福田蓼汀「杉田久女」（『俳句研究』、一九五一・七）
(8) 増田連『杉田久女ノート』（裏山書房、一九七八・四）
(9) 前掲「竹下しづの女書簡」には、より江による「かあいそう」「気のどく」な久女観がたびたび現れる。
(10) 石昌子『いのち曼陀羅』（東京美術、一九九六・七）
(11) 「春日遅々」（『俳句月刊』一九三四・五）の引用は北九州市立文学館蔵本より。
(12) 久女は「俳句月刊」（一九三四・七）に発表した「ホトトギスの新人群について」で、「尚拙文『春日遅々』及俳句研究創刊号中、私の率直な性格の為めあまりぶりすぎた不遜せん越さ。いやに高慢ちきな女らしからぬ言葉はお恥しいひとりよがりとして皆様にお詫申上ます」としている。「俳句

研究」創刊号（一九三四・三）には、随筆「蕗苔む」を発表している。

(13) 今泉康弘「素人社と『俳句月刊』のこと」（「日本古書通信」、二〇〇九・三）、「闇の中の檸檬——若き日の三谷昭と『俳句月刊』」（「日本文学誌要」、二〇一〇・三）など。

(14) 前掲「闇の中の檸檬——若き日の三谷昭と『俳句月刊』」

(15)「俳句月刊」（一九三四・三）には「香春嶽神宮院にて」として〈山かげに探ぐる一字や梅花節〉の句を寄せている。

(16)「ホトトギス」（一九三二・一〇）「雑詠」に「遠賀川長堤二句」のうち一句として〈青すゝき傘にかきわけ行けど〳〵〉で入選。

(17) 拙稿「杉田久女指導句会誌『かゝり火』について」（「全国文学館協議会紀要」九号、二〇一六・三）

※本稿の執筆にあたり、福岡市総合図書館、かごしま近代文学館のご教示に与りました。記してお礼申し上げます。

古賀照一（宗左近）「千恵子への遺書」解題・翻刻

稲田　大貴

1　序

本稿は宗左近が旧制第一高等学校時代に執筆しながら、未発表となった書簡体小説「千恵子への遺書」（未完、北九州市立文学館所蔵）の内容を紹介するものである。この原稿の存在については、展覧会「宙のかけらたち―詩人・宗左近」（二〇一四年一〇月）、ならびにその図録（北九州市立文学館、二〇一四・一〇）において紹介したが、内容の翻刻、作品の位置づけも含め、より詳細に紹介する。

宗左近の著作で初めて活字になったものは「護国会雑誌」第二号（一九四一・一二）に発表された小説「高尾懺悔」である。その後、同三号（一九四二・三）に、小説「なにぬねの」を発表している（両作とも「神代哲」という筆名を使用）[1]。本稿で紹介する「千恵子への遺書」はそれらに先んじて執筆されたと考えられる作品で、これら三作は全て宗の一つ年下の従妹、千恵子を書いたものである。宗は多くの著作中で千恵子との関係について言及しており、また晩年の一行詩集『響灘』（思潮社、一九九九・三）は、千恵子と自身との相聞歌の形式で書かれている。つまり千恵子という存在は宗の内面に深く入り込んだ、詩的営為と強く関わる存在の一人であり、「千恵子への遺書」は、未完成ではあるものの、千恵子を書いた最初期の作品として、宗左近研究において重要な作品であると考えられる。

2　千恵子について

作品の翻刻にあたり、本作で描かれる従妹・千恵子について、宗の著作から紹介しておきたい[2]。千恵子は宗の母方の従妹にあたり、母の長兄・安東寅（虎）八の二女として誕生、年齢は宗の一つ下ということから一九二〇（大正九）年の生まれ。二九（昭和四）年一〇月頃、寅八は千恵子とその姉を連れて、戸畑の宗の家を訪れる。白内障を思い、幼い姉妹を連れた寅八

は、二月ほど宗の実家に同居したのち、長女を連れて四国巡礼に出発、千恵子は若松にいた宗の母の妹の養女となった。

しかし四国巡礼の途中で、長女は結核で儚くなり、戻った寅八は若松の千恵子の養家の居候となる。その後、三一年五月に宗の父・丑之助が没したのち、千恵子の養家の叔母が離婚し、寅八と千恵子は宗の家に同居。しかし同年の七月、千恵子は「下地っこ」（芸者見習い）として、大分県姫島に売られることになった。寅八の生活費のためであったという。とはいえ、その後も千恵子はたびたび戸畑を訪れ、父と宗に会う機会はあった。

宗と千恵子の関係が変化を見せ始めるのは、三九年からである。宗は旧制一高に入学したその年の夏、戸畑に帰省していたが、母の一番上の姉が危篤状態となったため、熊本県菊池郡隈府町（現・熊本県菊池市隈府）へと向かった。千恵子も一緒であった。この戸畑への帰省、隈府行きの際に二人は恋に落ちた、と宗はのちに語っている(3)。戸畑に戻った後、芸者である千恵子は六日間ほど、「手線香を焚いて」（自分で自分を買って）、宗との時間を持った。

しかしこのとき、芸者である千恵子には身請けの話があり、そのことは宗にも伝えられたが、帰京後、宗は千恵子に宛てて、結婚したい旨の手紙を多く書いたという。四〇年夏には宗が千恵子の住む直方を訪ね、同じ時を過ごした（費用は千恵子が負担したという）。また四一年の秋には千恵子が東京を訪れ、共に過ごした。千恵子が、身請けされ、結婚した年については明確な言及がないが、四一年秋には結婚していたことが言明されており、また「高尾懺悔」には四〇年六月二七日に結婚した旨の記述がある。小説の記述のため信憑性には疑いも残るが、状況から大凡その時期であろうと推測される。その後、四三年一月に宗も結婚する。

その後、戦争を挟み、四八年、千恵子は二八歳で亡くなる。このことについて、宗は事実のみを書き、自身の思いについては殆ど記していない。しかし五〇年の後、『響灘』が書かれたことを考えれば、千恵子という存在は極めて重い。作家、詩人としてのスタートと言うべき作品で千恵子を書き、八〇歳という晩年で再び書いたそのことは、留意されるべきであろう。宗左近の文業を概観したとき、代表作の『炎える母』（彌生書房、一九六七・一〇）はじめ、自伝的エッセ

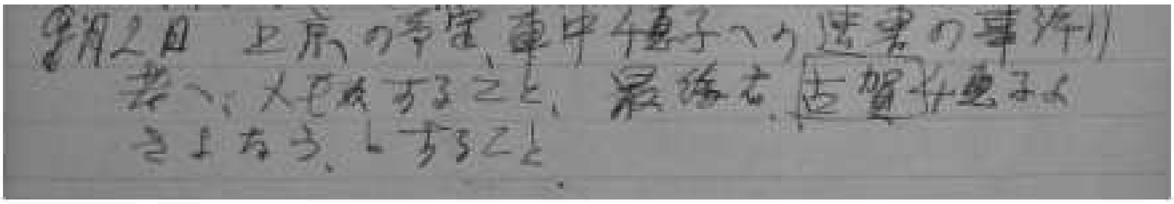
イ『ドキュメント・わが母　絆』（同前）などで書いた自身の母、そして《縄文》シリーズで書いた戦争で亡くなった一高時代の友人たちといった存在は、極めて大きな存在であり、宗の詩業の柱である。それに加えるべきもう一本の柱が、従妹・千恵子という存在であると考えられる。本稿で紹介する「千恵子への遺書」はあくまで小説ではあるが、宗の千恵子への想い、眼差しがどのようなものであったか、宗にとっての千恵子という存在の有り様の一端を明らかにする資料であると考える。

3　資料について

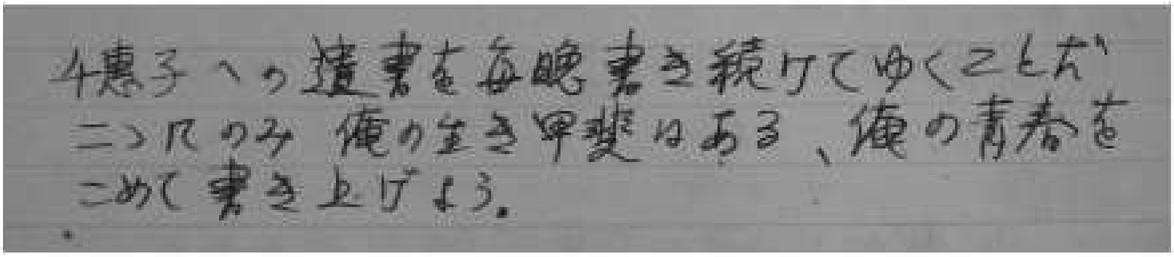
　次に原稿の体裁、保存状態、執筆時期について述べる。使用している原稿用紙は「KOKURA FUJIMOTO」製原稿用紙（20×20）。この用紙は当時、小倉市魚町（現・北九州市小倉北区魚町）に店舗を構えていた藤本文具店が製作販売していたものである。分量は二五枚が残るが、文章の途中で二五枚目が終わっていることから、ここで筆を折ったのではなく、以降は失われたと考えられる。本作の執筆時間と宗の作品への思い、枠外に記された執筆スケジュールを考えてみれば、途中で断絶していたとしても、二五枚という分量はあまりにも少なく、二五枚目以降は書かれなかったのではなく、失われたと考える方が自然であるように思われる。

　原稿の保存状態は、日焼け、破れ、虫食い、劣化破損が見られ、特に一枚目は日焼けが強い。北九州市立文学館に寄贈された際には、宗の字で「千恵子への遺書　原稿」と書かれた角形二号封筒に収められていた。おそらく後年の整理で封筒に収められ、その時点で二五枚のみが残っていたと考えられ、戦争の間、また戦後の転居の際などに失われたと考えられる。

　執筆時期については、作中、枠外の記述、宗の著作に見える千恵子に関する記述と、一九四一年の宗の日誌に見える、「9月2日　上京の予定。車中千恵子への遺書のこと許り考へ、メモすること、最後は古賀千恵子よさよなら、とすること」（図1参照）という記述、10月2日付「千恵子への遺書を毎晩書き続けてゆくことだ／こゝにのみ俺の生き甲斐はある、俺の青春をこめて書き上げよう」（図2参照）という記述などから、一九四一（昭和一六）年の夏、戸畑に帰省した



（図１）宗左近「雑記帳（1941.8.12～43.5.27）」（部分）　北九州市立文学館所蔵
「1941年９月２日」の記述。



（図２）宗左近「雑記帳（1941.8.12～43.5.27）」（部分）　北九州市立文学館所蔵
「1941年10月２日」の記述。

際に書き始められたと推定され、日記の記述の一〇月二日までは確実に書き継がれたことが分かる。また、作品冒頭に「作品第一番」と大書されており、第一作であることに疑いはない。しかし四一年一一月刊行の「護国会雑誌」一二号に「高尾懺悔」（四一年九月三〇日擱筆か）を掲載していることから、おそらく「千恵子への遺書」を書き始めたのちに「高尾懺悔」が書き始められ、そちらが先に完成したと推測される。

4　「千恵子への遺書」の位相

「千恵子への遺書」が「高尾懺悔」、「なにぬねの」に先行して（あるいは同時並行的に）書かれた作品と推測されることは前述した。この二作との内容比較を通じ、本作の位置付けを示したい。

本作を含めた三作は描かれる作中時間・舞台が異なる。「千恵子への遺書」は、主人公、古賀照一こと「俺」の年齢が、おそらく数え年の「二十三」と記されており、物語の基準時は四一年と推定される。「高尾懺悔」は四〇年六月～夏頃に設定され、舞台は東京と、試験を終えた主人公・輝一の故郷、戸畑である。

「なにぬねの」は、宗自身を思わせる主人公・滋が二十二歳に設定されており、四〇（昭和一五）年八月頃と推定され、危篤状態となった伯母を看取るために訪れた宮崎が舞台となっている(4)。三作ともに千恵子をモデルとした女性が重要な役割を果たしているという共通点がありながら、物語内時間、舞台、そして作品の主題はそれぞれ異なる。このことから、発表されなかった「千恵子への遺書」が、二作の下敷き、あるいは原作という見方はできず、別の作品と理解すべきであろう。

「千恵子への遺書」は書簡体小説で、タイトル通り、千恵子へ宛てた遺書（手紙）の体裁を採っている。一通の書簡の中で、物語内物語が展開し、またそれ以前の千恵子との手紙のやりとりや、小学校の同窓の女性、「山本時子」とのやりとりが挿入されており、複雑な構成を取っている。残されている原稿から本作の主題を読み取ることは難しいが、千恵子を巡る自身の内面、そのあり様を観念的に描き出そうという試みであろう。それは決して単純な恋情ではなく、中学時代から宗が抱いていた虚無感、厭世感、それに恋情と千恵子が身請けされるという現実への絶望が入り混じり、斜に構えたような視点・捉え方で記述している。

「高尾懺悔」は、歌舞伎舞踊の一、長唄「高尾懺悔の段」(5)が下敷きとなっており、本作「高尾懺悔」にもその舞台場面が描かれる。「高尾懺悔の段」は、遊女高尾の亡霊が、生前の罪を懺悔し、死後の地獄の責めを語る物語である。「高尾懺悔」では、芸者であって身請けされた千繪子がその状況と一致し、舞台を見た主人公の輝一は千繪子をそこに重ね見る。しかし、輝一を遊女高尾と重ね見ることも可能である(6)。互いに恋した千繪子が身請けされ、結婚する段になり、輝一がこれまでの自身の「罪」を自覚し、現在の状況の「地獄」を垣間見ている作品とも読める。

本作については稲垣眞美が次のように評している。

> やりきれぬ思いの一日、主人公は初めて歌舞伎座へ出かけて、六代目菊五郎（音羽屋）の演じる「高尾懺悔」の舞台に接し、男たちを迷わせた遊女高尾の前世と、地獄の現世の姿を二つながら見る。その舞台姿が、次のように印象派ふうの、あるいはダダかシュールリアリズムかと見まがう文体で描かれている。（『旧制一高の文学』国書刊行会、二〇〇六・二）

「ダダかシュールリアリズムかと見まがう文体」とあるが、当時の宗は象徴主義的な作風への傾倒があり、それが文体としてはシュルレアリスム的な文体にも見えるということであろう[7]。

「なにぬねの」は先に述べたように、伯母が危篤となり、それを看取るために訪れた宮崎が舞台である。親族らが伯母の家に集まっており、その係累の煩わしさを通じて、「何故に生きる」のか、「人はある思想で死ぬことが出來る」のか、という問題に向き合う作品である[8]。本作も、特に冒頭部と結末部に顕著だが、象徴主義的な文体が用いられている。

このように見たとき、「高尾懺悔」「なにぬねの」が象徴主義的な文体で書かれているのに対して、「千恵子への遺書」はそうではない。やや斜に構えた見方をしているものの、他の二作に比して説明的である。それは書簡体という体裁も関わっているのだろう。その意味において、当時の宗が千恵子にどのような思いを抱き、自己の内面と向き合っていたのかがより明確である。

この三作はおそらく、千恵子が身請けされ、結婚したことを契機として構想されたと考えられる。その出来事が宗の内面につけた傷は決して小さくはなかったろう。その傷と向き合い、最もその原体験に近い痕跡、表象として表れたのが、以下に紹介する「千恵子への遺書」である。

（いなだ　だいき　学芸員）

【注記】

(1) のち、遺族によって刊行された、宗左近『高尾懺悔』（深夜叢書社、二〇一〇・八）に二作とも収録されている。

(2) 千恵子についての記述は主に、宗の以下の著作に拠った。『縄文まで』（筑摩書房、一九八二・八）『ドキュメント・わが母 絆』（旺文社、一九八六・四）、『悲しみさえも星となる』（東京四季出版、一九九四・五）、『私の死生観』（新潮社、二〇〇一・三）、『縄文発進』（みき書房、一九九四・一二）、「故郷の名」（『北九州市立文学館文庫8　宗左近』北九州市立文学館、二〇一四・三（初出は「新潮」二〇〇一年二月号）

(3) 『縄文発進』（同前）、「故郷の名」（同前）参照。『縄文発進』には、戸畑への帰省の際、とあるが、隈府に行ったことは記されていない。しかし、「故郷の名」にはその帰省の際に隈府を訪れたことが書かれており、恋に落ちたのがどちらでのことかは確定できない。

(4) 宮崎の伯母が実際に亡くなったのは一九三七年のことであり、事実とは異なる設定となっている。

(5) 杵屋新右衛門作曲。一七四四（延享元）年、市村座初演。（日本名著全集刊行会編『日本名著全集　江戸文芸之部　第28巻　歌謡音曲集』（日本名著全集刊行会、一九二九・一二）参照）

(6) 「高尾懺悔」冒頭、主人公輝一は娘から送られてきた「撰名證」を受取り、「明愛」という女性的な名を付けられる。名前が良くないということで、母が寺に相談に行き、付けられた名である。女性名を付けることで、輝一と遊女高尾と重ね見る可能性も考えられる。

(7) 旧制一高に入学する頃から、宗はランボーやマラルメ、ヴェルレーヌといったフランス象徴派詩人に傾倒しており、当時友人たちと作っていた回覧雑誌「紅鮭」（戦災で焼失したと伝えられる）に掲載した「風景はのけぞった」という詩もまた、友人たちに「シュールレアリスムのもじりかい」などと評されたという（「故郷の名」（同前））。

(8) 稲垣眞美『旧制一高の文学』（同前）、齋藤愼爾「解題」（『高尾懺悔』（同前））を参照した。

【凡例】

原稿の翻刻は次の方針に拠る。

一、旧字体は新字体に、異体字は通行字体に適宜改めた。
一、仮名遣いは、原稿の通りとした。
一、削除部分は、原稿の通り削除し、本文に記載していない。
一、挿入は原稿の指示の通りとした。
一、ルビは原稿に指示があるもののみとした。
一、明らかな誤字は修正した。
一、枠外の書込みは、原稿の頁数を記し、《枠外記述》として、文末にまとめて記載した。
一、本文中に、今日の人権意識に照らして不適当な表現・語句があった場合でも、原文の芸術性・歴史性を考慮してそのままとした。

【翻刻】

作品第一番

千恵子への遺書　　　　古賀　照一

千恵子よ、
と俺の最期の呼びかけなのではあるが、多くの人がこんな場合にする様な「愛しい」とか「懐しい」とかいふ昔からちやんとある形容詞を、お前の名前の上に食付けることは、矢張り、しきりに躊躇はれるのだ。と書くと、「ううん、照ちやん、又あんな事を云つて――。他人行儀な　妙な人――」と、二皮眼を流してすねた睨み様をするお前がもう浮ぶ。迫つてくるお前の掌の熱さを万年筆のエボナイトから感じる。「あたり前ぢやないか、奥様」と、逸らす冷かしの苦しさ、を今はここでは、一行位ではいふまい。お前は俺の表情を、俺の語韻を、本当に知つては呉れなかつた。俺が此からお前に遺書を書くのは、多少でもよく知つて貰ひたいといふ未練と、遂には知つては呉れるまいといふ恨みと、からでもあらうか。何も書かない哀しい虚無の清潔さを知らないではない。だが憂世への煩悩にも青

白く焼かれたい悩ましさから逃げ得ないのだ。
俺はここまで胸をしめつけられる思ひで書いてきた。別れて二日、まだお前の香、体温が俺から脱けない。いやいま尚、渺々と溢れ脱けつゝあるからであらうか。俺の筆は止つた。三回書直して、止まる所は矢張りこゝなのは、だが、お前を身近に感じる事から丈ではなささうだ。俺が何故この遺書をお前に書くかをお前に一應納得もまあお前を知つてる積りの俺は諦めてるのだが、とに角書かうとして、而もそれが当人の俺にもつかめずたゞ胸元を突いて来るむく／＼する感情の群の壁の前にたぢ／＼と地団駄をふんでゐるからでもあらうか。徒に手を振る丈の空しい挑戦の苦しさからでもあらうか。――仕方はない俺はとも角、感情の一つ／＼に此から飛びかゝり取組んで見よう。そこに俺の血が流れ、その腥い臭をでも、お前がその白蝋質の鼻で嗅いでくれたら……。いや本当は俺はどく／＼の血をお前の血管の透いて見える水蜜桃の頬にぐわと投げつけたいのだらうか。氷の短刀（アイクチ）でお前のふくらんだ胸を一突きにしたいのだらうか。いやそのやうなまるで数式の様な鋭利な整つた見事さは俺には物足りない。俺は、持てるものなら禿鷹の嘴でめつきり青白く脂を引いたお前の身体中に打こみ　肉塊を打ちぎつては、あゝ俺は貪慾な猛禽だ。お前はもう少し哀愁を含ませてまゆをひそめ、悩ましさとも恨みともつかぬ光を細眼に湛へる。俺は危険だ。このサインの次にはお前の身体の熱は俺の息吐きをあたつめてゐるのだ。だが人間の社会には狭い乍らも場所があり、短い乍らも距離があるとは、悲しい乍らも、何といふ有難いことであらうか。お前は俺の傍にはゐない。俺がこの現実に一瞬目覚めると、お前の幽霊は一瞬目の眼のこはさに消えて失ふ。そして俺には白々した無表情の原稿用紙と万年筆とインクと、そしておゝ数箱の金鵄とがある。酒は魂を温し、タバコは魂を乾燥させる、そして人はタバコを吸つた方がいゝ。と昔々ギリシアの或る哲学者が云つたとか。
この乾燥に乗じて幽霊を払ひのけ、目覚めた一瞬を長びかせよう。タバコを吸はう。
タバコ、だが何といふお前の幽霊の魔力の不可思議さ、すでにこゝにもお前は居るのか。昭和十二年七月二十四日の午下りの戸畑の俺下宿の六畳の場が、もう俺の視野の中に鮮なライトを浴びて開幕してゐる。登場人物は言ふまでもなく俺とお前だが、見物人はお前

であり俺であらうか。いや俺はお前といふたつた一人の見物を前にして「春や春、春南方のローマンス」と云つた無声映画時代の解説者の役目を之からしてゆくのだらうか。俺は既にその恥態をこの二年間お前にくりかえしてゐた。二人の心のカメラそれ〴〵の色調と音階とで収つたあの一時間の現実は、二人の心のスクリーンに映し出されると、厳密にはもう昔の現実のまゝのトーキーではなかつたのだらうか。その度毎に染め上げられる色調と音階とを異にする、何と呼んでいゝ映画であらう。心理的現実映画、ふつとこんな言葉が浮んで来た。そしてお互に肉眼ではこの映画を見ることは出来ないのだ。こんなにまで沸々とした俺の血液の電力で映写機は廻り、当時とは変つてゐるにせよこんなにまであざやいだ色と音とを立ててフイルムは展開しつつあるのに。他人同志には心理の伺き眼鏡はないのだらうか。日常坐臥を共にする夫婦生活によつてのみ、心理の生理的な鏡は獲られるのであらうか。俺がお前を失つた（失つたといふ言葉にお前は又上眼に俺を見てゐる、二人が遠くに離れてしか生活できない事丈からでも失つたと云へるではなからうか。）秘密の一つがやつと判りかけた様な気もする。だが先廻りは止さう。

愚な、（さう一々俺の顔を見つめないでくれ。自嘲は既に痛くもかゆくもない、いやなければ反つて淋しいやうな日常茶飯事になつてゐるのだ）おれは言葉によつてこの映画の説明を大童になつてやつてゐたのだ。そして同じ解説をお前にも求めてゐたのだが、思へば——。だがだが、早走りはすまい。

中学四年から続いた俺の生白い、腐つた豆腐の様な厭世感は当然意志の溺死となり之は学業にも響かない筈はなく、ゴ棒抜きに下つて来てゐた卒業成績をかゝへての一高の試験には、予定通り落ちた。その昭和十二年四月に、危篤の宮崎の叔母を看病中に覚えたタバコをかみ乍ら、喫茶店や玉突に、専ら友人の惚れて張つてゐる女を眺める為にのみ入りびたつて送つた生温いお茶の様な、だらけた味の十九の春の四月五月六月。放蕩する兄貴と白髪の増す母との間にあつて、せめてタバコ位やめてやるのが、生きさせて貰つてる俺の義務かも知れないと不貞くされた心も混つて思つて止めた七月。その二十四日。俺は手もなく十八のお前の吸い付けタバコを口にしてゐた。「あんた女の人から手紙貰ふやろ」「いゝや」そんな会話の後だ。

俗に夫婦といふ二匹の金泥の蝙蝠のバット。「生れて始めて二人きりで話するんやね照ちやん」。真珠貝のやうなみそ歯の間の銀のかぶせに俺は眼をチカ〳〵させた。タバコの吸口はうつすら桃色が泌んでゐた。sweet & mild（吸うと参るぞ）。その前年の七月戸畑から直方へ仕換してすぐ一本になつてのその一年、お前の襟首は青みを増してゐた。お前は俺の手首の透けた静脈に眼を落してゐた。ジー〳〵蝉が真昼を鳴き続けてゐた。そして無為の俺はお前に対して何と云つたものであらう。俺には情感は既に沈んでゐたのであらうか、息づく人形を前にしての息苦しさよりこのまゝでは俺の退屈に堪へられなかつた。お前に退屈させやしないかとの心も働いた。物語りの世界に二人で入つて見よう、そして俺はあくまで傍観者で居なければならない。「ねえ千恵ちやん、年期があいたらどうするの。」「うち、踊と三味線のお師匠さんになるわ。」「結婚はするだらう。」「せんと、一人で——。」「そんなこと。今云つてもきつと誰かとするよ。」「誰ともせんと——。」「いや、人間は、殊に女はね、結婚しなきや嘘なんだし、其処以外に女の人生といふものはないし、——あんた矢張り幸福になりたいやろ」「——うちなんかもう貰い手がないと——。」「そりやあね——。」これからだ、虚構の真実への門をくぐらう。俺はお前の吸付けタバコを、バットの二匹のカウモリの中間に押しつけ消した。「冗らぬ男はそんなことをくだ〳〵云ふ様な男の所へは此方から行つてやらなきやいゝよ。僕の友達にならそんな男は一人も居らんとやけど——。友達のお嫁さんに世話してやろか。」「まあ照ちやん——。うち、あんたのお友達のお嫁さんになんかならんけ——。緑地のたもとの中からパラ〳〵になつたタバコを取りだした。「そんなとこに置いて、汚いよ。」「いゝと——。」虚構の世界から引返してはならない。「実はね、僕の小学校からの友達でお前を知つとてな、好いとる人があるんやけど——。」器用にお前はトン〳〵と叩いたタバコに火をつけた。一人の世界での外、女に向いて、好きとかそんな言葉を吐いたことはなかつた。煙のこちらで顔を少し赤らめた。俺はタバコをもらひ自分で点けた。「そんな人が居つても、うち知らんけ。」お前は俺の机の上から「新潮」をとると、パラ〳〵めくつて行つた。俺は間抜けな顔をしてゐたのではなからうか。一寸にや〳〵した。俺は人性の探究者、意地悪。「なら、俺の女房になら

んな」。めくる手が止み、タバコの灰が落ちた。そのまゝの一瞬がすぎて眼を一寸俺にあづけ、再びすぐ落した。「元海さんやおばさんが許すもんね。」会話の距離と会話との俺の娯まうとしたものは、一挙に跳び越えられてゐる。俺はさう云はせるお前の感情よりも、俺の実験（忌はしい悪魔）の方が大切であり、その不十分さにあせつて丈居たのであらうか。「でも六七年も先の事やろ、僕がうまくやるよ。」だが俺の試みは既に失敗してゐた。もう覚えてゐないのだが他愛もない世間話に三十分位を費したらしい。たゞその間で、お前は身長五尺丁度、体重十三貫、俺は五尺四寸、十六貫、そんな話をして二人で並んだのは、そしてその時、少し手がふれたの丈は、二人が小学校四五年の頃、近所のお金持の友達の家で見たアメリカのイエローストン等の絵葉書の幻燈画の様に、その七月よりももつと遠い過去から、古めかしいお伽話の、ぼやけた橙色の勝つた色彩で還つてくる。やがてお前は、お前の盲目の父のゐる俺の家に飯ると云ひ、俺のその下宿の住所を聞いた。手紙をくれる積りらしいと、俺の実験はまだ終りきつてはゐないのかと少し上ずつた声で答え表に出た。日が暑かつた。女との始めての同行が恥しく、俺はどん〳〵引離した。家が近くなつて振返へると、日傘にもたれるやうに急いでゐるお前の身体が高い日の下で妙に扁平に見えた。俺は何がなし激しい軽蔑を覚えた。

千恵子よ、お前は俺の当時の気持を今やつと正直に云ふのにおこつてゐるのぢやないだらうか。心を弄んだと。だが待つてくれ。最後まで読んで、おこるならおこつてくれ。ある複雑な心情に対して「弄ぶ」などといふ簡単なレッテルは張り切れないのだ。俺がどういふ気持でお前とつき合つて来たか、それは追ひ〳〵正直に書き進めてゆくつもりだ。復習は恥しくも嫌でもあらうが、まあ我慢してゐて呉れ。先日は色々お話出来まして千恵子本当に嬉しく存じました。末は僕の妻にと、心から忘れかねて嬉しく思ひます。こんな事云ふて恥しいですけれど、照ちやんと私とはいとこ同志ですけど、ずつと小さい時から照ちやんを好きでした。どうか私をお忘れなく、お手紙下さい。そんな意味の、之よりもつと稚拙な文章を二枚の便箋の経の上に並んだ手紙が二日後に来た。果してといふ程、えげつない気持は、すぐ困惑に変つた。たつたあれだけの言葉によりかゝつてくる素朴さ、小学校五年中退の、

誤字の多いギクシヤク字が、（臆面もないと、たはむれに口にした梅干のスツパイ嫌悪を覚えさせた。後悔とはまだ少しの距離があつた。いはゞ、その距離に、俺は二三日身を置いた。理想とか、道徳とか、権威とか、真理とか、そんなものが人間社会にあるもんか。あつた所でそんなものは嘘の皮だ。（人間とは蟻だ）。金と女丈だ。その為には肉親をも殺しかねない、人間とは蟻だ。そんな俺は、だが十九才であつた。その蟻の存在を容認することは出来ず、まして蟻にはなれず、厭世といふ感傷の徒なタバコを図太く、而し手付きだけは悟りすましたニヒル風に、吹かしてゐたのだ。そして、出した劣情の尻尾は、当時流行つた「長いまつげの可愛いゝあの子」に動いてゐた。ぽつちやり下ぶくれのお前とは全く対蹠的なキリリと細面の小麦色の俺と同年の今年実践女学校を出たが、俺の家の町内にゐて、中学時代から、何とか俺の存在を意識させようと、絶えず意識に上つてゐた。勿論恋とかあこがれとかではない。彼女を俺に惚れさせたい。此方から惚れて出るという心情のうずきは損だといふ打算と、はねつけられた場合の間抜面への嫌悪と、それと其の積極的な女への欲望が第一当時の俺には未だ生れて来てなかつたのであらうか。そして之はお前との場合と違つて計画的であり、一回も口を聞いたことがないことと、その家が町内での名代の固い家だといふこととに、冒険のスリルを感じてゐたのだ。その女の名前が、お前の来る二日前に友達の手で判り、即日俺は手紙を書き出してゐた。七月十四日、戸畑の市民総出で賑ふ氏神様八幡神社の祇園祭の夜、行つた小倉中学の同窓会の酒席で、貴女と小学校を同窓の名前を云へば貴女も御存知の筈の一人の友達が、古賀お前以前山本時子さんを好きだと云ひよつたろ、いや俺はさう嫌ひでもないと云つた丈だ、ごまかすなよ好きちはつきり云ひよつたやないか、そんなこと絶対にない――だが、それがどうしたち云ふんか、俺がお前の名前でラヴレターを出してやつたちいふんよ、友達ののぞき込んでするニヤ〳〵を、からかつてるんだ、嘘いつてるんだと否定したら、あはい街燈に照らされて雑閙の偽の淀んだどよめきに、黄色く、熱つぽくゆれてゐる街中を、そこゝに散らばり揺れてゐる赤や黄の紙片をふんづけて自分の下宿に皈り、酔ひにキリ〳〵痛む頭を横へると、貴女の黒い大きい眼と、ぎゆつと噛みしめたやうな少さな唇とが、怒りに青ざめて迫つてき

――貴女は僕を身の程知らずとさぞ軽蔑していらつしやるだらうと同じ町内がこはさに、金屋町の僕の家にも近頃は余程の用事でもない限り皈ることは出来なくなりました。この手紙の字でも判りますやうに先の古賀照一という名前で貴女の所へ来たであらう手紙の書主は僕ではないのです。どうぞ之を認めて下さい。こんな旨大体そんな調子の文章で、それまでやつと身につけてゐた文学少年的修辞を揮つて目の積んだ、その文房具屋で一番高價な厚い便箋にたうたう書きつゝあつたのだ。勿論そんな同窓会なんて、卒業して来今迄一度もやつたことはないし、そんな悪意ぢみた友達も、僕の冗らないか、妙に人のいゝ友達の中にも流石にゐはしないのだ。始から全然虚構の物語だ。漠然たる実に淡い小説家志望らしきものをもつてた俺の、悪戯をする小説と現実とをからませたそれこそ一番リアルな小説をという生意気な十九の夢なのだ、いや無為の業なのだ。そこへお前の手紙が来、手紙への嫌悪と、お前への後悔との間にあつて、俺は山本さんへの手紙に身体が向いてゆくのを感じた。俺の本能丈が大切だ。それに溺れて死んだつてかまふものか。他の事は知るものか。お前からの手紙はほこりを披つてゐる受験ノートの下に押し入れた。幼少からの道徳感とか倫理感とかが折々頭を抬げて、山本さんへの手紙は筆が渋つた。そんな時はお前からの手紙を引き出し、ぺろぺろと見えない舌なめずりをし、更に筆を運んだ。俺は今あの二十四日にお前が云つた言葉を思ひ出して了つた。「照ちやん、あんた純情さうなおとなしい顔ね。」あゝ。

始めにお断り致して置きますが、御心配とあれば、此れは御両親にもお見せ下さつても結構な手紙で御座います。だが一度丈は是非貴女がおよみ下さい。突然で不躾で御座いますが、僕は貴女と同じ町内に住む古賀照一と申す者です。カバンをだらりと下げた小肥りな、赤ら顔の中学生を御記憶ぢやないでせうか――。疑はしい字は漢和字典を引き、文法参考書によつて假名遣いを質し、十二三枚になつた便箋の書出しはそんな風であつた。それに僕はあなたを何となく立派ないゝ娘さんだと、遠くから、寧ろ尊敬の眼で眺めてゐるのです。假りにですよ、僕の友達が書き送つたやうな気持を抱いたにしろ、僕は気恥しくて何も云へなかつたことでありませう。三回目の最後の清書の時、乏しい舞台効果を強めてやれと、こんな事を書き

下した。茶色く長い最悪の封筒を使ひ、裏書は山本さんの母校の「戸畑市浅生尋常高等小学校同窓会」。ハンコでないのを少し可笑がり乍ら、ポトといふポストの手応へに、返事は必ず来るぞ、俺の投げた照明の中に山本さんはどんな姿を表すか、とひげもない顎を撫でた。来た、見知らぬ達筆の男名。お懐しい照一様。私の恥しい手紙は読んで下さつたのですか。それなら今日はもう七月三十一日です、何とも返事を下さらないのはあなた薄情ですわ。私は本気なんです。末は僕の妻にと、必ず忘れて下さいますな。六年でも十年でも待てと言へば必ず待ちます。例へ卑しい穢業はして居ても、流れる小川の心です。私を可哀さうだと思つたら手紙の一本位下さい。私はあなたを心から愛してゐます。淋しき千恵子より。私の照一さまへ。俺の出さぬ返事に対する、直方のお前からだ。下宿の小父さん小母さんへの気使ひに、こいつ覚えてやがると一寸気負ふ姿勢を見せたが、何か哀しいものがあつた。長謡まぢりのこんなものであつた。短い手紙だけに痛々しかつた。後悔が流れた。い丶女だ、そんな三十男の顔も腹の中にあつた。だが、身体の全部を揺すぶる、例へば慕はしい恋しいといふ感情の大波はそれまでと同じで一向に起らなかつた。愛情の炎に身を焼く愚は俺はしないぞ。俺は人生の傍観者。だがどう責任をとつたらい丶か。間が悪い気がし、困惑のしかめ面をした。葉書が来た。ギクシヤクの字。お手紙有難う御座いました。貴男のお友達からはお手紙は戴きませんでしたから御安心下さい。御返事が遅れてすみませんでした。八月四日。四回も五回も読み直したので今も忘れてゐない。此の通りである。まことに山本さんは事実を伝へて余りない。だが事実の世界の何といふ落漠。御座ゐのゐをいに直し——それだけ、誤字さへ貧困。貴男、之丈が面白い。俺の書いた貴女に対してからうじて対句の才能丈はあるらしい。だが何と、さそひのすきも判らない固い家の娘の頭は固いことよ。考えて見りやボヴァリィ夫人エンマなんてのも矢鱈に居られちやこはいみたいなもんだが。俺の文章の拙さか、それとも扁平な顔の——。それにしてもあの娘は、この四行半の葉書の如く単純で、不様だ、と思ひ込むことにして、俺は「なあーんだ」。お前が急に溌剌と見えた。次の瞬間索漠とした。山本さんは勿論お前も。一様な灰色の色模様。愈々の打つ手を打たなくてはなるまいて。お便り身に泌みて有難う御座いました。こ

の嘘つぱちな言葉の次には、二人の内さて何方らへの文句を続けよう。相手からいづれは何の返事も来やしないこの手紙は、ぼや〳〵すると全く同じ文句になつちまふ。俺は真実との無縁者。虚構。一度乗り出した虚構の舟の責任。先日は失禮しました。お志痛く胸に響きます。友達は貴女に手紙を出さなかつたと。私はお言葉通り信じたいのです。がすぐその眼の下から友達のニヤ〳〵笑ひの油の光つた巨きい鼻柱がつき出てくるのです。貴女の隠かな微笑を含んだお眼に友達を傷けず、僕を苦しめず、見事なお情けだと拝察致します。私は度し難い懐疑家でせう。さきの友達の手だと私が云ふのが実は本当の古賀照一で、何時までも返事を戴けない恥しさと口惜しさとから、友達に頼んで手の入つた、自尊心を傷めないですむ取消しの芝居を、本物の古賀照一と称してゐる私、即ち友達に頼んで打つて貰つてると、裏の裏をかくそれ丈かきすぎた、過りやすい明敏を、巧みに一枚上に行つた貴女の聡明さではないかと、この頃の空の様に疑念の雲がむくむく湧いて来るのも感じます。抜け切らない迷路のどんづまりの母親を呼びたい困惑の悲しさと、直接貴女に見捨てられる羞恥とで、僕は果しない苦しみに這入つてゆきます。だが、もうお手紙は下さらないで下さい。僕とても、懐疑の運命は知るものです。僕は貴女の善意をさへ信じればいゝのでせう。どうもすみませんでした。不思議な縁の貴女の一層の御幸福と御健康とを、或は御迷惑にお感じかも知れませぬが、祈らして戴きます。さよなら。最後屁。今度も高等の便箋に五六枚、だら〳〵書き延ばし、流石にケツと吐く様に出した唾で三戔切手をはつた。そんな切手をもう一枚貼らねば——。漸くやつて来た多忙のかくも退屈なのは——。先日は失禮致しました。今日は又返事が遅れてすみません。さてお志痛く胸に響きます。僕も千恵ちやんのと同じ様な言葉を連ねかけました、実は。そしてはつと心のどこかで驚くものがありました。急に止つたペンを見つめてる内にふとこのペンはお兄さんから貰つたけどうち要らんけと去年千恵ちやんが呉れたものだと、全く突然考へ出されました。千恵子、お前は変な顔をしてるね。嘘だ僕も千恵ちやん以下は全くの嘘だ。俺はその手紙の中にそんな際どい嘘は決して書きはしなかつた。千恵ちやん僕の友達の嫁さんになんかと僕は半分本気で云つたのに、じつと澄した白い横顔が一寸癪にさはり、僕の妻にとつひ冗談に云つ

て了つたのです。お許し下さい。ここの文章と書出しとの結ぎ、お前を傷けない様にと恐らくは疑りた苦心したでもあらうにどうにも俺は想ひ出せないのだ。記憶は事物への情熱に正比例するのでもあらうか。そして今、而もその手紙を受取つたお前に明かに虚疑の筆を滑らせようとしたのは、二十三になつた而も遺言を書からしてゐる俺は、よみがへらない記憶の隙間からふきつけた一陣の虚構の風にうかうかと乗せられ、相手をもそれに撞込まういふ性僻の、真実への眼を見出した戯作者か。昔と今との距離から立登る感傷か。自己への希望がこんな所に真実を現はしたのでもあらうか。でも僕は千恵ちやんを愛してゐます。どうかよく聞いて下さい。誤解しないで下さい。妹の様に。千恵ちやんが十の年に、相当内白障の悪くなつたお父さんと一緒に僕の家に来てから、大阪の伯母さんが嫁ぎ先きを変へる度毎に、大阪、若松、折尾、大阪と、轉々と移つて、僕と一緒に居る時は少なかつたが、八つも違つた異父兄を持つ僕は、内気で又、恥しく外には出ませんでしたが、妹の様に思つてゐました。しらみが湧きすぎたといふことで、男の様に刈り上げた十才の千恵ちやんの黒髪と、まだ直らん、悪い寝癖やと大阪の叔母さんに家の二階の欄干に縛られて寝てゐた十二才の千恵ちやんの白い脛は、今でもほの暖く懐しく、僕の胸の中に明滅してゐます。それから、長く中風であつた僕の父が死んで破産した之月、五年生で中退した千恵ちやんが頬骨の高い周旋人と汽車に乗込んだ時の、雨の中に冴えた三尺の真新しい黄色の帯――。僕はずつと千恵ちやんを幸福にしてやりたいと念じてゐました。今でも変りはありません。それが、正直、今度の手紙には吃驚しました。僕はまだ女として千恵ちやんを見たことはなかつたからです。僕の心は今動揺してゐますが、直に、うん必ず僕の妻にするから待つて居て下さい、とは云ひ切れないのです。動揺の治まつた結着の言葉を吐かうと、返事を遅らしたのです。と云つては千恵ちやんはやつぱり疑ふでせうか。薄情だと。だが人間てぎりぎりの処は皆薄情なんぢやないでせうか。二十四日に確か話したと思ふのですが、今年の四月宮崎の友達の髪結の息子の所での見聞は、それまでの僕の読書や兄の女出入などから得てゐた漠とした人間への認識を明めてくれました。僕は美しい大衆小説やその他にある美しい、恋の永遠さや深さを信じません。六年も七年も待つて下さると、お気持丈は

有難いと思ひます。だが六年とは長い年月です。その間には千恵ちゃんも僕以上に立派な男の人に何人も出会ふことでせうし、僕にも、千恵ちゃん以上に好きな、それも女として好きな人が出て来るかも知れません。今丈の感情に頼ることは僕には不安だし、約束を破りやしないかと空恐ろしいのです。何も誓はずに、時間の流に流れてゆきませう。二人とも同じ岸に流れついたなら、六年後でも十年後でも結婚しようぢやありませんか。僕の肉親の反対が何でありませうか。千恵ちゃん、愚な僕の冗らぬ冗談によつてそして今はこんな手紙によつて、苦しみを与へたのを、どうぞお許し下さい。そして千恵ちゃんに対して兄としての愛はかはらず持つてゆくことを信じて下さい。さよなら。尚、これからも御手紙ください。自分の長所缺点がはつきり掴めない僕は、千恵ちゃんが僕のどんな所が好きか教つて下さいませんか。あゝ何といふ下劣だ。やになりそうだ。俺の見事な馬脚。うん、照ちゃんがあんな手紙くれるもんやけ。うち照ちゃんに冗談に云ふたんに、うち、……。今度の隈府での通夜の晩、俺の爪をいぢりいぢり、お前は云つた。すまん、すまん、自動的に言葉が出、俺は爪から熱の出てゆく快さに没入してゐた。去年の春、俺に何の断りなしに安永さんに身受けされ正式に結婚したお前を、あの時の俺の手紙の後の方を一寸も腹に入れては呉れなかつたんだな

　と責める娼しさ（苦しさは、離れてゐる今、何かさう云つた言葉にも置換へられさうだ。それとも俺といふ人間の不純さに依るのだらうか）。を忘れてゐたのを、去年来、今度の隈府でも相当云つてはゐるのは又今あの手紙の大略を記憶で蘇生させ乍ら一寸まつたと軽く舌打ちをしてゐるのだ。虚構に身を置いた俺の手紙に、何といふ得手勝手。お前にも忘却が許されて悪いといふことはない。云つてみればなに一寸した記憶力はかりの問題さ。苦笑いするのだ。それが突然ベソに変つた。照ちゃん、愈々東京に行くんですね。しばらくお会ひ出来ませんのね。八月から三度も四度もお手紙戴いて返事も出しませずすみません。公休にも一度も帰りませずお逢いもしませんでした。許してね。私つらかつたのです。僕のどこが好きか恥しくて云へません、でも私は照ちゃんが好きです。今夜はお座敷で無理にウイスキーを五六杯飲まされて酔つて了ひました。つらいのです。照ちゃん、さよなら。東京に行つても何処に行つても、僕を想ふ女が直方に一人居る

ことを忘れないでね。そして必ず立派に成功して丁だいね。さよなら。私は今泣き乍ら書いてゐるのです。さよなら。私のお兄様照一様。馬鹿な妹より。ふーんと云つたきり、でも二回は読んだかも知れない。一銭銅貨位の二つ三つの　（未完）

《枠外記述》

【7頁】

（右側）書き終るといふことが俺に残された唯一の勝利だ。

（左側）書けなきや男古賀照一の負だ。敗北だ。

【8頁】

（上側）括弧とること。全篇を通して。

【9頁】

（上側）書き終わらなきや俺の負だ。

【10頁】

（左側）俺の筆の遅いのは明に怠惰と、不馴れとによる。

【11頁】

（右側）一時間三枚位の割合で何でもめちやくちやに書くのも作家迄の修業だ。

（上側）30枚書き終るまで眠らないこと
書き終へたら、二学期川端康成に会つて俺の生涯の道を相談をし、教えを乞ふこと。

17
11
17.00
17
18700
551
1100
29×19
19
261
29
551

（左側）全部で百枚位。29日30日31日1日で一通り書けないかな。
上京の日までに書けない筈はない。40枚を日課にしてやれ。

【12頁】

（上側）全体の構成とかスタイルとか、余分なものは一切棄てろ、ぐん〳〵ぐん〳〵書き飛ばすんだ。長つたらしくともいゝ、追つめてゆくのだ。

【13頁】

（上側）一切の顧慮を棄てろ、

【14頁】

（右側）愚図〳〵しないで書きやがれ。

（左側）真の恋愛とは、語といふもののなかつた大昔の原始人の男女になることである。

【17頁】
（右側）16の中程に戻る。
（上側）百枚や二百枚書き飛ばせなくてどうするつてんだ。
かういふ作品はどん〳〵書いて行き、書き了へた末に凝縮するより手はない。
【18頁】
（上側）125枚位にしたい。
速く書き終へなきや東京に出たら何時書き終へ得るか判らないのだ。
（左側）必ず幸福にしますからと約束し、千恵子を泣かしたのを、次へのつなぎに使はなくちやまづい。山本さんへの手紙を先に書くこと。
【19頁】
（右側）段々筆に油が乗りつゝある。頑張れよ
（上側）物凄くならなきや何事も出来やしない。今晩は朝8時まで徹夜だ。俺の遺言ぢやないか。頑張つて書くんだぞ。他人の小説を幾らよもうがそれが何だ。俺に取つて大切なことは自己の世界の建設だ。
（左側）傑作は幾つあらうと、俺の作品は、俺の遺言は一つしかないのだ。
【21頁】
（上側）他人の傑作をよんでも何にもなりやしねえ。冗長でも何でもいゝ、俺の心理のくまぐままで手探りで、（構成なんかの顧慮は余計なを）入つてゆくことと之丈が大切なんだ。之は之は所謂小説にしてはならない、遺言だ。整理はゆつくり後でいゝ。
【22頁】
（上側）二百枚位になつてもかまはぬ。書け書け。
【24頁】
（上側）タバコを吸ひ乍らどん〳〵書いてゆくことだ。他人の小説なんかよまない事だ。予定が全然立たないことにくよ〳〵するな。書くことだ、それにより道はひらかれる。
【25頁】
（上側）もう九月一日が二時間足らずでやつてくる。頑張つて書ける丈書かう。大体時代順に書いてゆかう。出来れば時々還らせること。

児童文学の雑誌「小さい旗」解題・総目次（1）第一号〜第五〇号

小野　恵

1　創刊から第一七号まで

「小さい旗」は、一九五五（昭和30）年一一月に北九州で創刊され、現在も発行が続く児童文学の雑誌である。児童文学者協会福岡支部所属の北九州在住者が集まり、「現実のきびしい環境の中にいる子供たちの希望の小さな旗印にしたい」という目標のもと、「小さな旗」の誌名で創刊された。当時、福岡支部の機関誌として「火の鳥」（一九五三・六創刊。のち「菱の実」）が四号まで発行

第１号（創刊号）

されていたが、次号発行が遅れていたため、溜まった原稿で「作品集」を出す目的で「小さな旗」の発行に至ったという。創刊時の同人は町本広、高橋さやか、冨永敏治、京都志朗、白仁田宗太の五名（創刊号の同人名簿順）。詩一篇、創作三篇、総頁数は二六頁だった。九号まで白仁田、一〇号からは冨永が編集を行った。第二号の発行は、一九五六年一月。この号から、「火の鳥」同人の世良絹子のほか、水上平吉が作品を寄せた。続く第三号は、前号から二年後の一九五八年一月、年明けに結成されたばかりの児童文学者協会北九州支部の機関誌として発行される（第一五号まで）。誌名も新たに「小さい旗」となった。第四号から、みずかみかずよ（第二八号まで「浅野多世」、「あさの・かずよ」、「水上多世」などの筆名を使用）が加わり、童話、詩を執筆した。

　五名から出発した「小さな旗」（三号から「小さい旗」）の同人は、創刊から五年目を迎える第一二号（一九六〇・八）の時点で、一八名に増えていた（第一五号まで一八名。第一六号、第一七号は名簿掲載がなく不明）。掲載ジャンルは、童話、小説、詩、翻訳、評論と広がりをみせる。戯曲・影絵劇などを書いた京

都志朗、創作を中心に執筆した世良絹子、町本広、有座久恵、山田道子、安田満、星高峰夫、中国児童文学の翻訳作品を発表した水上平吉などがいた。水上は、第六、七、一六、一七号を除く毎号、中国児童文学（第二四号から第二七号はモンゴルの民話）の翻訳を発表し、中国の児童文学者たちと相互交流を行った。また、徳永寿は第五号から第九号まで短期間の参加だったが、評論「北九州に於ける伝承わらべうた」（全五回）を残した。掲載作品数は、第一号から第三号までは四作品、第四号から第一〇号までは五～七作品、第一一号から第一七号までは六～一一作品と、同人の増加とともに増えていった。

　第一六号（一九六一・一二）以降は、全国から広く同人を募る目的で、児童文学者協会北九州支部の機関誌としての看板を降ろし、「小さい旗の会」の会誌として発行されることになった。毎月例会を開き研鑽を積み、「子どもの読まない」児童文学ではなく、「読まれる」児童文学の創作を志した（第一一号あとがきより）。

2　復刊第一号（第一八号）から第五〇号まで

　第一七号（一九六二・五）で一時休刊していた「小さい旗」は、およそ六年後の一九六八（昭和43）年七月、水上平吉主宰で復刊第一号（第一八号）を発行した。復刊前（第一五号）までの同人一八名のうち一一名が参加、新たに叶慶子（のちの松本梨江）、地下桃代、田中まき代など六名が加わり、一七名での再出発となった。作品以外に、各種児童文学賞の受賞作や推薦する児童書、寄贈図書の紹介、児童文学関連の講座や講演会の情報などを掲載し、「児童文学運動の一つの場として、文学創造上の質の向上をめざすと同時に、普及の面でも役立つ」雑誌を目指した（第二一号あとがきより）。

復刊第1号（通巻第18号）

　第二二号（一九六九・九）で同人は二〇名を超える。創刊一五周年を迎えて以降の一九七〇年台は、

「小さい旗」の勢いが最もあった時期といえる。例えば、第四号から季刊発行を基本としていたが、同人の増加により同年度は第二四号（一九七〇・四）から第二八号（一九七一・三）までの五冊を発行。第二六号（一九七〇・一〇）から第三四号（一九七二・一二）までは、各号の掲載作品数はほぼ一〇作品を超え、第三二号（一九七二・五）には最多の一四作品が掲載された。ただし第二七号（一九七一・一）は、世良絹子の長篇「海に開く道」の一作のみが掲載された（一作のみの掲載はこの号限り）。また一九七一（昭和46）年五月、牧書房の「児童文学同人誌シリーズ」（全八巻）の一つに全国の同人誌のなかから選ばれ、『犬となでしこの服と和平どん』が刊行されたことも、大きな出来事だった。この頃、ついに同人数は三三名となる（第二八号同人名簿より。翌号から執筆者のみの名簿掲載となり、同人数不明）。女性執筆者が増え、およそ三分の一を占めた。前述者以外の主な同人は、比江島重孝、守口康子、加来宣幸、楠崎倭子、堺孝幸、田中まき代、柳田庸子など。

また、前述の『犬となでしこの服と和平どん』の刊行を皮切りに、同人の書籍出版（自費出版を含む）が続いた。世良絹子『海にひらく道』（太平出版社、一九七一・一二）、水上平吉『おさげのパオチュン』（太平出版社、一九七二・九）、世良絹子『あっちゆきだよヒャータ』（フレーベル館、一九七五・九）、世良絹子『光の川』（ポプラ社、一九七六・一〇）、みずかみかずよ『少年詩集 馬でかければ』（葦書房、一九七七・五）などが出版された。

その他特筆すべき事項として、第二二号（一九六九・九）から第二八号（一九七一・三）まで、水上平吉「『小さい旗』のあゆみ」（全六回、第二七号を除く）が連載され、第一七号までの草創期を概観した。また第二八号から、巻頭コラム「ふぐちょうちん」がスタート。児童文学の動向や、教育論、同人の活躍など折々の話題をテーマとした時評で、第四五号（一九七六・三）まで左右太、第四六号（一九七六・七）以降は水上平吉が担当した。

一九七五年、創刊二〇周年を迎え、勢いは続く。第四八号（一九七七・三）は、寄せられた原稿が多かったことから「臨時特大号」として総頁数六八頁で発行。第四九号（一九七七・七）は、同年六月に逝去した創始

者の白仁田宗太追悼号となった。続く第五〇号（一九七八・一）の執筆者は、第四八号同様、巻頭の随筆と絵のページを除き、女性が占めた。掲載順に、徳永和子、みずかみかずよ、松尾初美、松本梨江、甲木美帆、方藤朋子、柳田庸子、門司秀子、さかいひろこの九名。新しい世代の台頭を感じさせる号となった。

（おの　めぐみ　学芸員）

【凡例】　掲載するのは、「小さい旗」（二号まで「小さな旗」）全一四二号（二〇一八年三月現在）のうち、第一号（一九五五年一一月発行）から第五〇号（一九七八年一月発行）までの細目である。

一、各号の見出しは奥付に従い、巻号、発行年月日、編集責任者、発行所を記した。また、表紙に記載されている表記は号数のあと（　）内に補った。（例　第一一号（1960・春））

一、各項目の記述は、ジャンル・表題・執筆者名（または画家名）・ページの順に記載し、ジャンル・各表題ごとに改行した。記載に当たっては本文にある表記を優先し作成した。ジャンル名は編者が付した。ただし、あとがき、同人名簿・執筆者住所などはジャンル名を付けず　―　とした。

一、細目は底本の目次に掲載がない項目も含め、配列は本文のページ順とした。底本にノンブルが記載されていない場合は、便宜上編者がノンブルを付した。

一、執筆者の表記に関しては、次のような処理を行なった。

(1)　イニシャルで表記され執筆者が明らかな場合は、（　）内に執筆者名を補った。（例　M→M（水上平吉））

(2)　執筆者の記載がない作品は、（記名なし）とした。ただし、同人名簿・執筆者住所、寄贈図書・雑誌一覧、広告等、作品以外の項目については　―　とした。

一、明らかな誤記・誤植と判断されるものは訂正した。

一、仮名づかいは原文表記どおりとし、旧漢字は新字体に改めた。なおルビは省略した。

「小さい旗」総目次（1）第一号～第五〇号

第一号[1]　昭和三〇年一一月一日
白仁田宗太（編集兼発行人）、小さな旗社（発行所）
詩　目標　高橋さやか　2
創作〈童話〉涼しい朝　冨永敏治　3
創作　豚屋の子　京都志朗　7
創作　僕らは悪いか　白仁田宗太　16
―　「小さな旗」創刊について　白仁田宗太　26
―　同人名簿（五名）　―　26

第二号　昭和三一年一月三一日
白仁田宗太（編集兼発行人）、小さな旗社（発行所）
翻訳〈中国童話〉三娃と小さな金色の馬　李白英（作）、水上平吉（訳）　1
創作　台風の中の風たち　世良絹子　6
創作　蛍光燈物語　冨永敏治　8
批評「ささぶね船長」と永井萌二　町本広　12
―　あとがき　（記名なし）　14
―　同人名簿（八名）　―　14

第三号　昭和三三年一月二五日
児童文学者協会北九州支部（発行所）
詩　とどまらないリズムに　高橋さやか　1
創作　移転　世良絹子　2
翻訳〈中国童話〉史陽「小丁西のたのしみ会」／任大霖「小雪の花」／艾路「はりねずみの母さんリンゴとり」／孫定淦「ぼくのとぼくらの」／許浪「つなひき」　水上平吉（訳）　12
創作〈戯曲〉桃太郎誕生　京都志朗　15
―　あとがき　（記名なし）　28
―　同人名簿（六名）　―　28

第四号[2]　昭和三三年四月二〇日
白仁田宗太（編集・責任者）
児童文学者協会北九州支部（発行所）
創作〈戯曲〉桃太郎誕生　京都志朗　1
創作　豊後浄瑠璃　町本広　21
創作　迷子の子りす　浅野多世[3]　23
翻訳　帰ってきた小ガン[4]　呉夢超（作）、水上平吉（訳）　28
批評　三号寸評　町本広　38

— 同人名簿（一〇名） — 38
— あとがき （記名なし） — 38

第五号 昭和三三年七月二一日
白仁田宗太（編集責任者）
日本児童文学者協会北九州支部（発行所）

創作 星空 髙橋さやか 1
詩 ベルの瞳 浅野多世 14
評論 北九州に於ける伝承わらべうた 徳永寿 15
創作 ありになったタロちゃん 浅野多世 19
創作 番犬虎吉 山田道子 26
創作 いじわるたこさん 世良絹子 33
翻訳〈中国童話〉史陽「おたより」／陸元虎「新しい皮靴」 水上平吉（訳） 35
— 同人名簿（一二名） — 39
— あとがき 白仁田宗太 39

第六号 昭和三三年一〇月二五日
白仁田宗太（編集責任者）
日本児童文学協会北九州支部（発行所）

創作 かどから三げんめ 冨永敏治 1
創作 ラシャのカバン 浅野多世 3
評論 北九州に於ける伝承わらべうた（二） 徳永寿 7
創作 音さんと又やんの話 白仁田宗太 12
創作 星空（承前） 髙橋さやか 20
— あとがき 白仁田宗太 42
— 同人名簿（一一名） — 43

第七号 昭和三四年一月二一日[5]
白仁田宗太（編集責任者）
日本児童文学協会北九州支部（発行）

創作 みどりのタオル 山田道子 1
創作〈童話〉年とったオオカミの種イモ あさの・かずよ 6
創作 水玉とくものす 世良絹子 12
評論 北九州に於ける伝承わらべうた（三） 徳永寿 17
創作 次郎のはなし 冨永敏治 21
— あとがき 白仁田宗太 36
— 同人名簿（一一名） — 37

第八号 昭和三四年四月二〇日
白仁田宗太（編集責任者）
日本児童文学協会北九州支部（発行）

創作〈影絵劇〉悪魔と山彦小僧 京都志朗 1

創作　やもりと連帯責任　山田道子　18
創作　節分の日のあかおに　あさの・かずよ　26
評論　北九州に於ける伝承わらべうた（四）　徳永寿　32
翻訳〈中国童話〉チョウチョウのカガミ
　金近（作）、水上平吉（訳）　35
―　あとがき　白仁田宗太　40
評論　金近氏について　水上平吉　41
―　同人名簿（一一名）　―　41

第九号　昭和三四年七月三〇日

白仁田宗太（編集責任者）
日本児童文学協会北九州支部（発行者）

創作　古い切手帳　町本広　1
創作　島のタンポポ　安田満　9
創作　沼に近い坂道　星高峰夫　11
創作　紅いボタン　あさの・かずよ　16
評論　北九州に於ける伝承わらべうた（五）　徳永寿　19
創作　馳けた星っ子　久冨正美　22
翻訳〈中国児童文学〉アヒル飼い
　ホア・ヤオ・アン（作）、水上平吉（訳）　23
―　あとがき　白仁田宗太　28
―　同人名簿（一二名）　―　29

第一〇号　昭和三四年一二月一〇日

富永敏治（編集人）、白仁田宗太（発行人）
日本児童文学協会北九州支部（発行所）

創作　楠じいさん　久冨正美　2
詩　遺稿「昇天」より　徳永寿　5
創作　手まり唄　富永敏治　6
創作　くまの山のゆうびんはいたつ　世良絹子　13
随筆　某月某日　空港祭　富永敏治　18
創作　消えた愛犬　星高峰夫　19
創作　登龍門　有座久恵　26
翻訳〈中国児童文学〉猪八戒スイカを食う
　文仿（作）、水上平吉（訳）　32
創作〈放送劇〉河童物語　京都志朗　38
来信「人民中国」よりの御礼状
　「人民中国」編集部・康達釧　52
追悼　同人「徳永寿氏」逝去（ご遺族からの手紙）　徳永圭子　52
―　あとがき　（記名なし）　53
―　同人名簿（一四名）　―　53
―　「小さい旗」総目次　（記名なし）　54

第一一号（1960・春）(6)

昭和三五年四月一〇日
富永敏治（編集人）、白仁田宗太（発行人）
日本児童文学者協会北九州支部（発行所）

翻訳〈中国科学文芸作品〉失そうした兄さん　于止（作）、水上平吉（訳）　2
来信　中国からの便り「人民中国」編集部・康建釧　28
詩　ビラはおりてくる　久冨正美　29
創作　おしゃべりクオクオ　向田恵子　30
詩　元旦の朝に／雑煮（皿倉山キャンプ）　水上多世　34
批評　10号を読んで　古賀哲二（「火の国」）
今井浩二（SKドラマ研究会）
星加輝光（「九州作家」同人）　36
紹介　受贈誌　―　38
批評　児童文学の一つの問題―あわせて前号の作品評　星高峰夫　39
随筆　コマーシャル（※コーナー「窓」）　京都士朗　41
随筆　たいこやき（※コーナー「窓」）　世良絹子　41
―　あとがき　T（富永敏治）　42
―　同人名簿（一七名）　―　43

第一二号(7)（1960・夏の号）

昭和三五年八月二〇日
富永敏治（編集人）、白仁田宗太（発行人）
日本児童文学者協会北九州支部（発行所）

創作　ゴンペと狐と子豚と烏　有座久恵　2
詩　雲　日高広範　14
創作　馬方の捨吉　水上多世　15
創作　隊長　枳殻冬子　27
詩　四月のうた　水上多世　40
紹介　新刊紹介（高橋さやか編『子どもと生活「おはなしのくに」第一集』、比江島重孝『かっぱ小僧』）　白仁田宗太　40
創作　不思議な茶碗　山田道子　42
創作　海の子　富永敏治　55
―　同人名簿（一八名）　―　62
紹介　同人消息（花木愛吉氏『随想集　赤い大根』出版）　（記名なし）　62
翻訳〈中国の児童文学〉ヒツジを追って　碧野（作）、水上平吉（訳）　63
報告　支部だより　富永敏治　68

第一三号（1961・No.1）
昭和三六年一月一五日
富永敏治（編集人）、白仁田宗太（発行人）
日本児童文学者協会北九州支部（発行所）
随筆　幼年童話について　枳穀冬子　1
紹介　新刊紹介（玉井政雄『河童の釘』、
実業之日本社刊『世界の童話―三年生』
※李白英作・水上平吉訳「三ちゃんと
金の子うま」収録）　（記名なし）　4
評論　児童文学作家と「童心」あわせて前号の
作品評　星高峰夫　5
翻訳　月あかり　張有徳（作）、水上平吉（訳）　10
紹介　新刊紹介（加来宣幸編『福岡の民話』）
玉井政雄　10
創作　道子　富永敏治　22
―　同人名簿（一八名）　―　44
報告　支部だより　（記名なし）　44

第一四号（1961・春の号）
昭和三六年四月一五日
日本児童文学者協会北九州支部（編集人、発行所）
創作　厄介な遺産―現代の民話として―　星高峯夫　1
創作　畑の好きな王さま　水上多世　8
創作　ほうがんどうの曲　白仁田宗太　15
翻訳　ある犬の話　きこく・ふゆこ　24
翻訳〈中国の民話　プーイー族〉さるとばった
覃大鵬（記録）、水上平吉（訳）　29
翻訳〈中国の民話　チベット族〉たからの石
傳仇（整理）、水上平吉（訳）　30
―　あとがき　Ｓ（白仁田宗太）　34
報告　同人名簿（一八名）　―　34

第一五号（1961・夏の号）
昭和三六年八月一〇日
富永敏治（編集人）、白仁田宗太（発行人）
日本児童文学者協会北九州支部（発行所）
創作〈幼児のための童話集（2、3才児のた
めに）〉くりひろい／とんぼの羽　枳穀冬子　2
創作〈幼児のための童話集（1、2才児のた
めに）〉どんぶらこのはなし／おかあさ
んにいいものあげたはなし　〃　2
創作　えいぶりるふうる　白仁田宗太　10
創作　なでしこの服　水上多世　17
詩　かきね　日高広範　27

詩　夏の詩〈あめ／ひるねのうた／ありのぎょうれつ／とびたいな／きんぎょ／ふうりんや〉　枳殻冬子　28
創作　〈ふくおかの民話〉きつねの茶釜　大山義夫　31
詩　大海の歌（空と海／海の水／波の花／海はねむった／海の風／月）　劉毓民（作）、水上平吉（訳）　37
創作　やまの星　富永敏治　40
批評　リズムの発見(8)　（記名なし）　48
—　同人名簿（一八名）　—　50
随筆　小川未明の思いで　富永久美子　51
—　後記　（記名なし）　52

第一六号（1961・No.4）
昭和三六年一二月一〇日
富永敏治（編集人）、白仁田宗太（発行人）
小さい旗の会（発行）

創作　浮浪児メイ　有座久恵　1
詩　少年詩集　その一（夏）（おじいさんの薬／おじいさんの畑／回転／出来事）　水上多世　20
創作　わたしたちの先生　世良絹子　33
紹介　受贈雑誌　—　43
詩　北風吹けば　白仁田宗太　44
創作　かいらん板　田中まき代　47
紹介　新刊案内（玉井政雄随想集『猫の靴』）　玉井政雄　52
創作　〈幼年童話〉とらっぽちゃん　枳殻冬子　53
創作　ケガをしたサンタクロース　武田幸一　57
随筆　幼年童話について（其の二）　枳殻冬子　60
—　執筆者住所録（八名）　—　65
紹介　小さい旗の会について　（記名なし）　66

第一七号（1962・No.1）
昭和三七年五月一三日
富永敏治（編集人）、白仁田宗太（発行人）
日本児童文学者協会北九州支部　小さい旗の会（発行所）

創作　四郎さん　さようなら　世良絹子　2
創作　桜姫物語　安田満　24
紹介　受贈誌　—　29
創作　先生のうで時計　大山義夫　30
創作　空をとんだあかい石　水上多世　38
創作　とらっぽちゃん（2）　枳殻冬子　44
創作　鍵　富永敏治　49
創作　かちょうげんぼ（家長原簿）　山田道子　54

―執筆者住所― 62
創作 左近太郎と山愚 地上ももよ 63

第一八号（1968・夏、復刊第一号）(9)
昭和四三年七月二二日
水上平吉（編集・発行人）
日本児童文学者協会北九州支部 小さい旗の会（発行所）
創作 鏡山の神話 地下桃代 1
紹介 受贈誌 ― 9
創作 五月のくろねこ 世良絹子 10
報告 第一回全国児童文学同人誌会議メモ 水上平吉 10
創作 桃色になりたいなー 叶慶子(10) 12
創作 五人のインディアン坊やとシカ 槙淳子 14
翻訳〈中国の科学幻想物語り〉クジラ牧場
叔昌、于止（作）、水上平吉（訳） 16
紹介 第八回日本児童文学者協会賞（長崎源之助『ヒョコタンの山羊』、第一回日本児童文学者協会新人賞（阿満紀美子『車のいろは空のいろ』、宮下和男『きょうまんさまの夜』） （記名なし） 22
創作 タコタコあがれ 富永敏治 23
創作 はつたまご 田中まき代 25
―同人名簿（一七名）― 29
創作〈影絵劇〉チチロの星
京都志朗（作）、藤原真理子（原案） 30
―あとがき S（白仁田宗太）― 49

第一九号（1968・秋）
昭和四三年一〇月二七日
白仁田宗太、久冨正美、水上平吉（編集委員）
日本児童文学者協会北九州支部 小さい旗の会（発行所）
創作 人間ちゅう奴ァ…… 京都志朗 1
紹介 おすすめしたい童話雑誌 隔月刊『びわの実学校』 水上平吉 14
詩〈こどものうた〉かくれんぼ
とみながとしはる 15
創作 土を掘っていたら 世良絹子 16
創作 きこえない雨の日 叶慶子 19
創作 テントウムシ 富永敏治 21
批評 前号評 魅力ある個性を 安藤美紀夫 23
創作 かげ 地下桃代 24
報告 新版「幼年童話十二ヵ月」(仮称) 編集終る
（記名なし） 33
―同人名簿（一七名）― 33

翻訳〈中国の科学幻想物語〉鼻のないゾウ
遅叔昌、于止（作）、水上平吉（訳） 34
来信 復刊発足 意義ぶかい 比江島重孝 42
― あとがき Q（久富正美）、水上平吉 43

第二〇号（1969・春） 昭和四四年三月九日
白仁田宗太、久富正美、水上平吉（編集委員）
日本児童文学者協会北九州支部 小さい旗の会（発行所）
創作 ジャカルタの犬 安田満 1
― 同人名簿（一九名） ― 15
詩 こころ 白仁田宗太 16
詩 きんかんのうた 水上多世 18
詩 はる 水上多世 19
創作 みどりの目 世良絹子 20
来信 おたより（京都志朗の「人間ちゅう奴ァ
……」の感想） 椋鳩十 23
創作 ほんとうのことごっこ 田中まき代 23
創作 ママが泣いたのは 叶慶子 26
創作 アキラとブラッキー 槇淳子 27
翻訳〈中国の少年詩〉営火燃えるとき
袁鷹（作）、水上平吉（訳） 34
翻訳〈中国の児童文学〉見はり所三号
黎汝清（作）、水上平吉（訳） 36
― あとがき Q（久富正美）、水上平吉 41

第二一号（1969・夏） 昭和四四年六月一五日
白仁田宗太、久富正美、水上平吉（編集委員）
小さい旗の会（発行所）
創作 和平どんの借金ばらい 堺孝幸 1
創作 からすとすずめ 世良絹子 28
詩 森にも春が 叶慶子 30
創作 白くませんせい 叶慶子 31
紹介 すいせん図書（椋鳩十『チビサル兄弟』、
加来宣幸『郷土と文学教育』） （記名なし） 31
紹介 第九回日本児童文学者協会賞（来栖良夫
『くろ助』）、第二回日本児童文学者協会新
人賞（柚木象吉『ああ！五郎』、鈴木悦
生「祭りの日」）、第一回北川千代賞（遠
藤寛子「深い雪の中で」） （記名なし） 33
創作 もうひとりのケンちゃん 田中まき代 34
― 同人名簿（一九名） ― 37
翻訳〈中国の動物記〉雨やどりしたヒョウ
郭風（作）、水上平吉（訳） 38
翻訳〈中国の幼年童話〉トンパと小ウサギ

李喬（作）、水上平吉（訳）　41
―　あとがき　水上平吉　43

第二二号（1969・秋）　昭和四四年九月二二日
白仁田宗太、久冨正美、水上平吉（編集委員）
日本児童文学者協会北九州支部　小さい旗の会（発行所）
評論「小さい旗」のあゆみ　①創刊号　水上平吉　表紙裏
創作〈SF童話〉海底人の国　比江島重孝　1
詩　夏のおわりに（ポプラ／星／町かど／キョウチクトウ）　水上多世　10
創作　うごいてよ　世良絹子　13
紹介「お話の森」全六巻を出版、寄贈図書『カナナの槍』（記名なし）　14
創作　どこへいくの？にしきへびのおじさん　水上多世　15
創作　獣歩青天　地下桃代　20
随筆　切抜き　ジャーナル（記名なし）　33
―　同人名簿（二二名）　―　33
翻訳　ドジョッコのスイカ番　張洋（作）、水上平吉（訳）　34
―　あとがき　水上平吉　39

第二三号（1970・新春）　昭和四五年一月一八日
白仁田宗太、久冨正美、水上平吉（編集委員）
小さい旗の会（発行所）
評論「小さい旗」のあゆみ　②ジャンルの広がり　水上平吉　表紙裏
創作　おしゃべりさん　世良絹子　1
詩　きられたポプラ　水上多世　18
創作　うしろ向き教室　富永敏治　19
紹介　寄贈図書（小沢正『こぶたのかくれんぼ』、阿南哲朗『よるの動物園』）、短篇童話を募集（びわの実学校40号・増大号）―　19
詩　おふろのなかで／灯台／運動会　叶慶子　30
創作　面と少年　中山千代子　31
―　同人名簿（二二名）　―　33
翻訳〈中国童話〉オオカミ谷のふしぎな木の実　相燕翼（作）、水上平吉（訳）　34
―　あとがき　水上平吉　41

第二四号（1970・春）　昭和四五年四月一九日
白仁田宗太、久冨正美、水上平吉（編集委員）
小さい旗の会（発行所）

評論「小さい旗」のあゆみ　③人往来　水上平吉　表紙裏
創作〈人形劇〉殿さんとお百姓〝寒田ばなし〟より　京都志朗　1
紹介　資料　火野葦平の児童文学　（記名なし）　17
詩　おばあさんのたより／ぎょうにゅうがかり／はるのつき　水上多世　18
創作　手　比江島重孝　20
紹介　親子で読んでほしい本―九州と児童文学―　M（水上平吉か）　34
創作　かっぱのタキギ（ちいさい村ものがたり①）　久冨正美　30
翻訳〈モンゴル人民共和国の民話〉和尚と大工／ひげのながいちび男　H・フォッザ（作）、水上平吉（文）　32
―　あとがき　水上平吉　36
―　同人名簿（二七名）　―　37

第二五号（1970・夏）　昭和四五年六月二一日
白仁田宗太、久冨正美、水上平吉（編集委員）
小さい旗の会（発行所）
評論「小さい旗」のあゆみ　④編集者　水上平吉　表紙裏
評論　児童文学におけることばとこころ　高橋さやか　1
詩　貯水池の午後　水上多世　4
創作　進軍ラッパ　富永敏治　5
創作　かっぱの田植え（ちいさい村のものがたり②）　久冨正美　18
創作　くまさんさんぽ　世良絹子　20
紹介　寄贈図書（武田幸一『サボテン島の風』）、「朝日人形劇まつり」福岡と北九州で盛会、日本児童文学者協会創立二十五周年記念全国講演会の北九州開催を決める　M（水上平吉）　22
創作　さふらんの花のシンは赤いよね　田中まき代　23
翻訳〈モンゴル人民共和国の詩〉ヒツジを飼う子ども　B・バゴスーディ（作）、水上平吉（訳）　31
翻訳〈中国のノンフィクション児童文学〉ヒツジを守った姉妹　中国少年児童出版社（編）、水上平吉（訳）　32
―　あとがき　水上平吉　36
―　同人名簿（二八名）　―　37

第二六号（1970・秋）　昭和四五年一〇月二一日

白仁田宗太、久冨正美、水上平吉（編集委員）
小さい旗の会（発行所）
評論 「小さい旗」のあゆみ ⑤女性の進出 水上平吉 表紙裏
創作 白いぶらんこ 叶慶子 1
随筆 私の詩ができるとき 水上多世 13
詩 ハト／るすばん／数字にみんな目をまわす／カレーの日 水上多世 14
創作 熱い翼 富永敏治 17
創作 かっぱの枕（ちいさい村ものがたり③） 久冨正美 26
創作 青いやね 赤いやね 世良絹子 28
創作 ちびっこ大すきいたずらが 田中まき代 31
創作 にわとりの約束 堺孝幸 33
創作 チョウとあじさい もりようこ 37
翻訳 〈モンゴルの民話〉とんちこじき／こじき裁判官
H／フォッザ（作）、水上平吉（文） 39
紹介 児童文学講演会開催、寄贈図書（武田幸一『武田幸一童話集』、菅忠道編『川をわたる歌声』、後藤竜二『ボタ山は燃えている』、かたおかしろう『牛鬼たいじ』）
（記名なし） 43
― あとがき 水上平吉 43

第二七号（1971 新春特大号）
昭和四六年一月一七日
白仁田宗太、久冨正美、水上平吉（編集委員）
小さい旗の会（発行所）
紹介 世良絹子の作品歴 （記名なし） 表紙裏
創作 海に開く道[11] 世良絹子 1
紹介 「小さい旗」同人編『犬となでしこの服と和平どん』、寄贈図書（森の仲間編『夕やけ牧場』、ア・ガイダール『もえる石』）
（記名なし） 75
― あとがき 水上平吉 75
広告[12] TNCテレビ西日本「アンデルセン物語」 ― 裏表紙

第二八号（1971年・春）
昭和四六年三月一四日
白仁田宗太、久冨正美、水上平吉（編集委員）
小さい旗の会（発行所）
評論 「小さい旗」のあゆみ⑥ 水上平吉 表紙裏
随筆 〈ふぐちょうちん〉 左右太 1
創作 一本の砂糖キビ 比江島重孝 2

創作　疎開家族　富永敏治　7
詩　まっくろ　すずめ／とぶ　はねる／いき
たいな　水上多世　18
創作　かっぱのもくれん（ちいさい村ものがたり④）
久冨正美　20
創作　にん坊のふしぎな一日　守口康子　22
創作　焼き芋屋さんの話　柳田庸子　33
創作　犬とねこ　白仁田宗太　34
創作　ケンちゃんの虹　中川賢一郎　36
創作　おじいちゃん　白仁田宗太　38
翻訳　〈中国・ヤオ族の民話〉牛のつの
粛甘牛（作）、水上平吉（訳）　38
紹介　寄贈図書（つのぶえ同人編『てんぐと人
魚とヘリコプター』、子どもの町同人編
『もぐらと金魚とみそむすび』、むくはと
じゅう『モモちゃんとあかね』）　―　41
―　あとがき　水上平吉　41
―　同人名簿（三三名）　―　42
広告　児童文学同人誌シリーズ〈全八巻〉
（枚書房）　―　42
広告　ＴＮＣテレビ西日本「アンデルセン物語」　―　裏表紙

第二九号（1971・夏）　昭和四六年六月二〇日
白仁田宗太、久冨正美、水上平吉（編集委員）
紹介　髙橋さやか著『言語・文学教育と人格形
成』（昭和四十六年三月十七日付朝日新
聞読書特集欄より）　（記名なし）　表紙裏
随筆　〈ふぐちょうちん〉「あの目の光」　左右太　1
創作　みなみかぜ　世良絹子　2
創作　ごんぎつねを撃たないで　片山英一郎　8
創作　お姉ちゃん　叶慶子　16
―　執筆者住所（一〇名）　―　21
詩　どうぶつえんで（らくだ／かばくん／
ぺんぎん／らいおん）　みずかみかずよ　22
創作　タイやきのおみやげ　白仁田宗太　24
創作　へびの友だち　柳田庸子　27
創作　お日さまと雨　三木本杏　29
創作　みつぼちみっちゃん　楠崎倭子　31
創作　艦上攻撃機〝流星〟　富永敏治　32
翻訳　〈モンゴルの民話〉羊飼いとライオン
Ｈ・フォッザ（作）、水上平吉（訳）　41
報告　第三回同人誌作品研究会に出席して　世良絹子　44
紹介　寄贈図書（児童文学同人誌シリーズ全八
巻ほか一冊）　―　45

紹介 児童文化短信（第十七回朝日夏期保育大学、第五回幼児教育と幼年文学夏期講座） （記名なし） 45
― あとがき 水上平吉 45
広告 TNCテレビ西日本「アンデルセン物語」 ― 裏表紙
広告 児童文学同人誌シリーズ⑧『犬となでしこの眼と和平どん』 ― 裏表紙

第三〇号（1971・秋） 記念特大号

昭和四六年一〇月一〇日

白仁田宗太、久冨正美、水上平吉（編集委員）

紹介 比江島重孝『荒野の少年』（「日本児童文学」八月号より）、比江島重孝『これはどっこい』（「図書新聞」昭和四六年六月五日付より） （記名なし） 表紙裏
随筆〈ふぐちょうちん〉こん虫の標本・健康優良児 左右太 1
創作 夏の少女 安田満 2
創作 朝の救急車 富永敏治 14
創作 てのひらのサインちょう 白仁田宗太 24
詩〈こどものうた〉おんぼろどけい、かいのうた、てんのかみさま、きょねんのかえる、さかだち みずかみかずよ 28
創作 竹笛 片山英一郎 31
創作 なべはじりの実 もりようこ 48
創作 見なれない足跡 黒崎春夫 54
創作 しおからおじさん 橋本邦子 59
翻訳〈中国ヤオ族の民話〉月を射る 蕭甘牛（作）、水上平吉（訳） 60
紹介 九州の児童文化短信（椋鳩十氏に第一回赤い鳥文学賞、あまんきみこ・山下夕美子両氏福岡へ） （記名なし） 63
紹介 寄贈図書（佐藤通雅『新美南吉童話論』ほか七冊） ― 63
― 執筆者住所（九名） ― 63
― あとがき 水上平吉 63
広告 TNCテレビ西日本「アンデルセン物語」 ― 裏表紙
広告 児童文学同人誌シリーズ⑧『犬となでしこの眼と和平どん』 ― 裏表紙

第三一号（1972年・新春）

昭和四七年一月二三日

白仁田宗太、久冨正美、水上平吉（編集委員）

紹介 小さい旗の会あんない （記名なし） 表紙裏

随筆〈ふぐちょうちん〉童話を書く趣味　左右太　1
創作　シャミセンガイ＝メカジャ　世良絹子　2
紹介　関英雄『白い蝶の記』　水上平吉　8
創作　風車のうた　柳田庸子　9
詩　〈こどものうた〉ゆれて ゆれて　穂坂寛志　13
創作　赤いかさ　片山英一郎　14
紹介　寄贈図書（あまんきみこ『ゆうたのゆき
まつり』ほか五冊）、執筆者住所（一一名）　―　20
創作　たんぽぽのかさ　矢部協子　21
来信　読書感想文『「海に開く道」の作者への
手紙』　池田博（大洲市立菅田中学校三年）　24
詩　〈こどものうた〉はつひ／くちぶえ／さざ
んか／ないている　みずかみかずよ　26
創作　海の顔　田中まき代　28
翻訳〈中国チワン族の民話〉タイコじいさん
粛甘牛（作）、水上平吉（訳）　45
追悼　地下桃代さん　（記名なし）　48
―　あとがき　水上平吉　49
広告　図書月販広告（名著復刻　日本児童文学
館全三二巻）　―　裏表紙

第三二号（1972年・初夏）

昭和四七年五月五日
白仁田宗太、久冨正美、水上平吉、片山英一郎（編集委員）
小さい旗の会（発行所）

紹介　小さい旗同人の本（比江島重孝『神さま
と土ぐも』、世良絹子『海にひらく道』、
小さい旗同人編『犬となでしこの服と和
平どん』）　（記名なし）　表紙裏
随筆〈ふぐちょうちん〉おとなの目こどもの目　左右太　1
創作　かくれんぼう　比江島重孝　2
創作　まわり道　叶慶子　8
創作　大空襲　富永敏治　23
詩　バス・ルームにて／正義の味方にゃかな
わない　片山英一郎　31
創作　かっぽのひなまつり（小さい村ものがたり⑤）　久冨正美　32
詩　〈こどものうた〉つぼみ／だれだ／まち
うける／みのむし　みずかみかずよ　34
創作　ちっちゃいの一つ　世良絹子　36
投稿　ちいさいはた　くすざきまさき　40
創作　あめ屋マーちゃんのホームラン　大川りつ子　1

報告　『海にひらく道』を踏みしめて　世良絹子ご夫妻囲み出版記念会　（記名なし）　45
創作　おまつり　橋本邦子　46
詩　あててごらん　穂坂寛志　50
翻訳　〈中国・チワン族の民話〉弓太郎の竜たいじ　肖丁三（作）、水上平吉（訳）　51
投稿　「海にひらく道」を読んで　辻野希代子（小学校六年）　54
紹介　寄贈図書（武田幸一『てんぐの橋』ほか五冊）　―　55
―　執筆者住所（一三名）　―　55
―　あとがき　片山英一郎　―　55
広告　図書月販広告（名著復刻　日本児童文学館全三二巻）　―　裏表紙

第三三号（1972年・初秋）

昭和四七年八月二〇日

白仁田宗太、久冨正美、水上平吉、片山英一郎（編集委員）

小さい旗の会（発行所）

紹介　近刊　中国児童文学短編集『おさげのパオチュン』　（記名なし）　表紙裏
随筆　〈ふぐちょうちん〉軍国主義の復活　左右太　1
創作　ぎっちょの万しゃん　白仁田宗太　2
創作　特攻人形　富永敏治　10
詩　うたの絵本（テントウ虫のハイキング／クモのはかせの天気よほう／だれかが、かじったお月さま／カエルの夕ごはん／マリモ／ひとりぼっちの、西のかぜ）　黒崎春夫　18
詩　〈こどものうた〉みみずのうた／ごめんなさい／ぴりからいっとう／五月のたいざんぼく／ぼくのつくったさんかくひこうき／ハト1／ハト2　みずかみかずよ　20
創作　光りの川（連載第一回）　世良絹子　23
創作　洋（ひろし）　楠崎倭子　31
創作　つまないで　原田夏美　34
創作　絵かきのおじさん　矢部協子　37
創作　追ってくる死人　木下一夫　39
創作　耳の中のクックルウ　片山英一郎　48
紹介　寄贈図書（『郷土のものがたり―福岡県の民話と伝説』ほか四冊）　―　49
―　あとがき　水上平吉　49

第三四号（1972年・冬）
昭和四七年一二月一七日
白仁田宗太、久冨正美、水上平吉、片山英一郎（編集委員）
小さい旗の会（発行所）

紹介 原稿募集のご案内 ― 表紙裏
随筆〈ふぐちょうちん〉中国児童文学短編集〝おさげのパオチェン〟出版 左右太 1
詩 〈少年詩〉夜の国道／人形／星／こま／ポプラはみあげる／秋／親はどこいった みずかみかずよ 2
創作 燃える夏 冨永敏治 6
創作 節子 大石信子 15
創作 お母さんの自慢ばなし 矢部協子 23
創作 トンボとさむらい 白仁田宗太 27
創作 コローのおねがい 叶慶子 29
詩 〈こどものうた〉かえりみち／となりのばあさん／もしもしかあさん／うまれたよ／こわいばん みずかみかずよ 32
創作 けんさくという犬 柳田庸子 34
創作 光りの川（連載第二回） 世良絹子 37
― 執筆者住所（九名） ― 47
― あとがき 水上平吉 47
広告「小さい旗」同人の本（世良絹子『海にひらく道』ほか） ― 裏表紙

第三五号（1973年・早春）
てんぐとかっぱ・特大号
昭和四八年二月一八日
白仁田宗太、久冨正美、水上平吉、片山英一郎（編集委員）
小さい旗の会（発行所）

紹介 松下竜一『風成の女たち』（記名なし） 表紙裏
創作 てんぐさま ござるか 比江島重孝 1
紹介「子ども世界」にご協力を（※作品募集のお知らせ） 安田満 23
詩 〈こどものうた〉大ワシ／くうき／かえらぬ魂は／冬の朝 みずかみかずよ 24
創作 カッパとガラスの城 白仁田宗太 26
創作 ほんとうのおくりもの 柳田庸子 38
創作 光りの川（連載第三回） 世良絹子 43
短歌「おさげのパオチェン」出版を祝いて 白仁田宗太 54
報告 日中友好のかけ橋のひとつ「おさげのパオチェン」出版記念パーティーのこと 久冨正美 54

紹介　寄贈図書（松下竜一『絵本切る日々』ほか四冊）　―　55
―　あとがき　水上平吉　55
広告　「小さい旗」同人の本（世良絹子『海にひらく道』ほか）　―　裏表紙

第三六号（1973年・初夏）

昭和四八年五月二七日
白仁田宗太、久冨正美、水上平吉、片山英一郎（編集委員）
小さい旗の会（発行所）

紹介　おすすめしたい月刊誌　「日本児童文学」、「子どもの本棚」　（記名なし）　表紙裏
随筆〈ふぐちょうちん〉子どもの自殺は大人への抗議　左右太　1
創作　山の村からついてきた花　比江島重孝　2
詩　二月の雨よ／宝石／備前焼の大徳利／竹かご／つぼ／芭蕉布／手／生きるということ／救い／ふしぎな数字／そのまやかしを／はだかになっても／ゆれうごくもの／花ざかり／さくらみち／アメリカバイソン／／一つのケーキ　みずかみかずよ　17
創作　白い灰　富永敏治　24
創作　ガマは生きていた　白仁田宗太　33
創作　「こちらこそ」　叶慶子　35
紹介　寄贈図書（来栖良夫『戦争と人間のいのち』ほか六冊）　―　38
―　執筆者住所（八名）　―
創作　光りの川（連載第四回）　世良絹子　39
随筆　学校教育、見たこと聞いたこと　大川りつ子　52
紹介　絵本専門誌　続々誕生　久冨正美　56
―　あとがき　水上平吉　57
広告　「小さい旗」同人の本（世良絹子『海にひらく道』ほか）　―　裏表紙

第三七号（1973年・初秋）

昭和四八年八月一九日
白仁田宗太、久冨正美、水上平吉、片山英一郎（編集委員）
小さい旗の会（発行所）

紹介〈おすすめします〉『トンネル路地』など　水上平吉　表紙裏
随筆〈ふぐちょうちん〉「えらい人」　左右太　1
詩　貝のうた／くちなしのはな／絵のなかの蝶／夏空の下／たしかめてみたい／ひまわり／墓穴を掘るのはだれ？／ふりおと

していく／歩道橋／どこまでもつづいている／ほたる／大きな呼吸（いき）／まるぼうず／へんだな／なつのきた山／とべるか／もう出ていたよ　みずかみかずよ　2
創作　長崎のふえ　白仁田宗太　10
創作　光りの川（最終回）　世良絹子　18
随筆　小さな村の小さな図書館　Q　33
創作　神さまのおなげき　木下一夫　34
創作　虹の子のおはなし　方藤朋子　39
創作　雨をよぶふえ　柳田庸子　43
創作　10ごうかんはおおきなふね　くろさわるみこ　49
創作　けい子せんせい　楠崎倭子　50
創作　おいしゃさん　白仁田宗太　51
創作　めがね　白仁田宗太　52
紹介　寄贈図書（秋田雨雀『白鳥の国』ほか　一一冊）　―　53
―　あとがき　水上平吉　53
広告「小さい旗」同人の本（世良絹子『海にらく道』ほか）　―　裏表紙

第三八号（1973年・冬）　昭和四八年一二月二三日

白仁田宗太、久富正美、水上平吉、片山英一郎（編集委員）　小さい旗の会（発行所）
紹介〈おすすめします〉いぬいとみこ『ちいさなちいさな駅長さんの話』など（記名なし）　表紙裏
随筆〈ふぐちょうちん〉「愛の詩」金賞一席に　左右太　1
創作　父ちゃんがんばってや　ひがしのりお　2
来信「じっとしていてはいけない」編集子へのおたより　楠崎倭子　13
創作　よっぱらった　うのとり　白仁田宗太　14
詩　おばあさんの手／小さな手―じゅんこは三歳白血病で死亡―／どんぐりごま／秋かぜに／夕空／みの虫／すずむし／海は夕やけ―志賀島の落日―／海辺の別れ／あなたのなかに／つゆくさ／階段／枯葉／どこにあるの／かゆいのは―せなかのお灸―／だれかきくの？／タコ／ひびきあうもの／きこえないとき／きこえますよ／あしか／つばき／はこやなぎ―春のはじめ―／学校がえりの橋の上　みずかみかずよ　21
紹介　寄贈図書（古世古和子『竜宮へいったトミばあやん』ほか五冊）　―　29

創作　思春期　片山英一郎　30
随筆　横谷輝氏と小さい旗　水上平吉　39
報告　「犬となでしこの服と和平どん」出版記念会での横谷輝氏のあいさつ（要旨）　富永敏治（記録）　40
翻訳〈中国・チュワン族のはなし〉三人兄弟　粛甘牛（編著）、水上平吉（訳）　42
―　あとがき　水上平吉　43
広告　「小さい旗」同人の本（世良絹子『海にひらく道』ほか）　―　裏表紙

第三九号（１９７４年・春）

昭和四九年三月二四日
白仁田宗太、久冨正美、水上平吉、片山英一郎（編集委員）
小さい旗の会（発行所）
紹介〈おすすめします〉松下竜一『５０００匹のホタル』など　水上平吉　表紙裏
随筆〈ふぐちょうちん〉遊ぶ子どもの声きけば　左右太　1
創作　別れの金魚　安田満　2
詩　〈生きもののうた〉かげ／まんげつ／めだか／みみず／すいせん／まぶしいポプラ／はだかのポプラ／どうすりゃあいいんだ／ざくろ／ぼくはさかな／夕ぐれ　みずかみかずよ　43
紹介　寄贈図書（しかた・しん『笑えよ！ヒラメくん』ほか三冊）　―　45
創作　青さんとチビ　叶慶子　46
創作　やせ男は地獄だ　木下一夫　51
―　あとがき　水上平吉　53
広告　第六回全国子どもの本と児童文化講座熊本会場へのご案内　―　裏表紙

第四〇号（１９７４年・夏）

昭和四九年七月一四日
白仁田宗太、久冨正美、水上平吉、片山英一郎（編集委員）
小さい旗の会（発行所）
紹介〈おすすめします〉比江島重孝『タンカタンカタンタン』など　（記名なし）　表紙裏
創作〈ふぐちょうちん〉人生ゲーム　左右太　1
創作　みずのなか　世良絹子　2
創作　のらねこになったミケ　白仁田宗太　4
創作　あなぐまときつね　柳田庸子　8
創作　やさしいきもち　柳田庸子　9

紹介　寄贈図書（あまんきみこ『よもぎのはらのたんじょうかい』ほか三冊）、執筆者住所（六名）　―　9
創作　とうりゃんせ　方藤朋子　10
創作　五木のにくまれっ子（火の国の物語・第二話）　武田幸一　13
詩　手のなか　みずかみかずよ　26
創作　とおい道―少女よしこの物語―　みずかみかずよ　27
―　あとがき　水上平吉　63
広告　第六回全国子どもの本と児童文化講座熊本会場へのご案内　―　裏表紙

第四一号（１９７４年・初冬）

昭和四九年一一月二四日

白仁田宗太、久冨正美、水上平吉、片山英一郎（編集委員）

紹介　詩をよみましょう（『鶴見正夫少年詩集―日本海の詩』）　多（みずかみかずよ）　表紙裏
随筆〈ふぐちょうちん〉万の倉より子が宝　左右太　1
創作　５０００このぼうし　野口明美　2
創作　うみへいったこねこのムギ　くろさわるみこ　4
創作　雪の天使　矢部協子　16
創作　リラの花　小松寛志　17
詩　くまぜみ／せみとり／いなずま／夕立／馬でかける―阿蘇草千里―／入道雲―阿蘇外輪山より―／スイカのめ／みのむし／ひとつのことば／はなびのように／はいしゃ／ひかるみず／開花／さようなら／林のなか／雪／はだかのさくら　みずかみかずよ　19
創作　くろもじの花　白仁田宗太　24
―　執筆者住所（七名）　―　27
創作　二万トンネルは花ざかり　田中まきよ　28
紹介　寄贈図書（長崎源之助『ままはもうおこってない』ほか六冊）　―　40
―　あとがき　水上平吉　41

第四二号（１９７５年・春）

昭和五〇年三月二三日

白仁田宗太、久冨正美、水上平吉、片山英一郎（編集委員）

小さい旗の会（発行所）

随筆〈ふぐちょうちん〉大人も読む児童文学　左右太　1
創作〈人形劇〉キャアとチャペ　京都志朗　2
紹介〈おすすめします〉季刊「ぎんやんま」、

執筆者住所（九名）　（記名なし）　2
創作　すりっぱのわにわに　くろさわるみこ　13
創作　おばけきのこ　野口明美　15
投稿　かわいそうなぞうをよんで
くすざきひろき（愛媛県大洲小一年）　16
創作　ねしょんべん小僧シー小僧　柳田庸子　18
詩　朝の道／スイセン／坂の上／スモッグのない日／ふゆのあさ／やぶれたくつ／くり毛の馬／ふしぎ／二匹の小犬／はるのよる／こまってる　みずかみかずよ　22
創作　千羽鶴　楠崎倭子　25
紹介　寄贈図書（上崎美恵子『海がうたう歌』）　―　30
創作　つめたい指　叶慶子　31
創作　軍馬　安田満　34
紹介　「土の絵本」のこと　久冨正美　44
―　あとがき　水上平吉　45
広告　「小さい旗」同人の本（世良絹子『海にひらく道』ほか）　―　裏表紙

第四三号（1975年・夏）
昭和五〇年七月二〇日
白仁田宗太、久冨正美、水上平吉、片山英一郎（編集委員）
小さい旗の会（発行所）

随筆　〈ふぐちょうちん〉カブト虫と造り花　左右太　1
創作　ヤギのめがねや　田辺みゆき　2
創作　ハゼの実のおてだま　世良絹子　7
紹介　寄贈図書・雑誌（竹崎有斐『なきむしなば太郎』ほか一九冊）　―　9
詩　〈花はうたう〉きんせんか／バラ／もくれん／白い花／めざめ―クロッカスによせて―／とおいそら／せいのび／さいごのぼん／くすぐったくて／スイートピー　みずかみかずよ　10
創作　フルートを吹くおじいさん　方藤朋子　13
―　あとがき　水上平吉　47
広告　「小さい旗」同人の本（武田幸一『もえる杉の木谷』ほか）　―　裏表紙

第四四号（1975年・秋）
創刊20周年記念特大号
昭和五〇年一〇月二六日
白仁田宗太、久冨正美、水上平吉、片山英一郎（編集委員）
小さい旗の会（発行所）

創作〈ふぐちょうちん〉学習塾は子どもの公害　左右太　1
創作　不知火の夜明け　武田幸一　2
創作　小さなヒデヨシ　田辺みゆき　13
―　執筆者住所（七名）　―　20
詩　北海道の旅から　ほか（小さな青空／雨あがりのポプラ／摩周湖／じゃがいも畑のつづく道／すずしいみどり／白いあし―美幌峠から斜里へ―／オホーツク海／ノサップ岬／カニをのせて―根室から釧路へ―／どっちのまけ？／はやすぎた／これしかないの）　みずかみかずよ　21
創作　フランス山と少年　比江島重孝　25
紹介　寄贈図書・雑誌（門司秀子『わたしの人名簿』ほか二三冊）　―　39
創作　孤島の牛　安田満　40
随筆　新たなる発展のために―創刊二十周年をふり返る―　水上平吉　60
―　あとがき　水上平吉　61
広告「小さい旗」同人の本（世良絹子『あっちゆきだよヒャータ』ほか）　―　裏表紙

第四五号（1976年・春）

昭和五一年三月二七日

白仁田宗太、久冨正美、水上平吉、片山英一郎（編集委員）

小さい旗の会（発行所）

随筆〈ふぐちょうちん〉個性と努力と　左右太　1
創作　モッコちゃんのコーヒー店　くろさわるみこ　2
紹介　寄贈図書（宮川ひろ『先生のつうしんぼ』ほか四冊）　―　8
創作　ジュンのたのみごと　田辺みゆき　9
―　四四号の訂正　―　14
詩〈よろこびをうたう〉いいきもち／秋の蝶／秋のタンポポ／おくてのけいとう／月下美人／招待券／笑っている　みずかみかずよ　15
イラスト〈絵のページ〉（無題）　久冨正美　18
創作　しんるい　山蔦八重　20
創作　海の底で　山蔦八重　21
創作　おじさんのお手玉　松尾初美　22
創作　仁王様のはなくそ　柳田庸子　24
来信　ほんとによかったなあ!!『あっちゆきだよヒャータ』小さい読者の反響紹介　篠原朋子（福岡市立宮竹小学校四年）ほか　26
紹介　寄贈図書・雑誌（大隈岩雄『北九州の民

話』ほか四四冊）　―　27
創作　読めない手紙　田中まきよ　28
追悼　童話も書いてほしかった　故納富進画伯を悼む　水上平吉　40
―　新しい同人・協力会員紹介（一二名）　―　41
―　あとがき　水上平吉　41
広告　「小さい旗」同人の本（世良絹子『あっちゆきだよヒャータ』ほか）　―　裏表紙

第四六号（1976年・夏）　昭和五一年七月二五日
白仁田宗太、久冨正美、水上平吉、片山英一郎（編集委員）　小さい旗の会（発行所）

随筆〈ふぐちょうちん〉パサパサ人間と万引き大流行　水上平吉　1
創作　じゃんけんぽん　白仁田宗太　2
創作　そのうちじょうずに　叶慶子　4
創作　ヤドカリのゆめ　松尾初美　7
創作　ゆみこはひつじのくにへ　くろさわるみこ　9
創作　あまがえるとつちがえる　柳田庸子　12
創作　さくらふぶき　田辺みゆき　14
―　執筆者住所（一〇名）　―　15
イラスト〈絵のページ〉（無題）　久冨正美　16
創作　綿菓子　山蔦八重　18
創作　バテレン子守唄　武田幸一　21
紹介　寄贈図書・雑誌（神宮輝夫『タマタン』ほか三七冊）　―　41
紹介　夏休み読書の参考に「私の勧める児童図書」（西日本新聞から）(13)　水上平吉、高橋さやか、加来宣幸　42
―　あとがき　水上平吉　43
広告　「小さい旗」同人の本（世良絹子『あっちゆきだよヒャータ』ほか）　―　裏表紙

第四七号（1976年・秋）　昭和五一年一一月二八日
白仁田宗太、久冨正美、水上平吉、片山英一郎（編集委員）　小さい旗の会（発行所）

随筆〈ふぐちょうちん〉日本児童文学者協会創立30周年に思う　水上平吉　1
創作　フクロウともだち　世良絹子　2
創作　ポタ山横町事件　野口明美　13
―　執筆者住所（七名）　―　21
イラスト〈絵のページ〉すずめのうた　久冨正美　22

詩　山の上から／ほどきたい／あかいカーテン／ごめんね／着なれたやつ／さわらないで／月夜　みずかみかずよ　24
創作　ゆうこちゃんと赤いでんわ　方藤朋子　26
紹介　寄贈雑誌（「詩の季節」八〇号ほか二六冊）―　28
創作　星とすず虫　藤崎千代子　29
創作　はなくそひょうたん　柳田庸子　30
紹介　小さい旗の会について　水上平吉　32
創作　ねずみ一家のうた　みずかみかずよ　33
紹介　「私の勧める児童図書」（西日本新聞から）　水上平吉、高橋さやか、加来宣幸　35
紹介　寄贈図書（小森香子『山の英雄ヤーノシク』ほか九冊）―　36
―　あとがき　水上平吉　37
広告　「小さい旗」同人の本（世良絹子『光の川』ほか）―　裏表紙

第四八号（1977年・春）臨時特大号
昭和五二年三月二七日
白仁田宗太、久冨正美、水上平吉、片山英一郎（編集委員）
小さい旗の会（発行所）

随筆〈ふぐちょうちん〉みずかみかずよ少年詩集「馬でかければ」出版へ　水上平吉　1
創作　さかだち三かいおでこをぼちん　みずかみかずよ　2
創作　ロロのこいのぼり　方藤朋子　7
創作　ねむれないから　叶慶子　10
創作　ひでちゃんとケーキ　松尾初美　12
創作　きいろいりぼんのさくらこ　ジャム島へのぼうけん　野口明美　14
紹介　「私の勧める児童図書」（西日本新聞から）　水上平吉、高橋さやか、加来宣幸　28
詩　二月の雪　みずかみかずよ　29
イラスト〈絵のページ〉野をゆく船　久冨正美　30
創作　金色のウインク　田辺みゆき　32
投稿〈児童の書いたお話〉「おへその先祖」ほか　佐賀市北川副小二年　守口研一　47
創作　ある転校生　岩切祐子　49
創作　いのちの木　藤崎千代子　53
紹介　寄贈雑誌（「プリズム」二〇号ほか三一冊）、執筆者紹介（一一名）―　56
創作　手紙　阿部好憲　57
紹介　寄贈図書（世良絹子『光の川』ほか四一冊）―　68
―　あとがき　（記名なし）　69

広告「小さい旗」同人の本（世良絹子『光の川』ほか）　—　裏表紙

第四九号（1977年・夏）　白仁田宗太追悼号
昭和五二年七月三一日
富永敏治、久冨正美、水上平吉、片山英一郎（編集委員）
小さい旗の会（発行所）

随筆〈ふぐちょうちん〉創刊の原点にかえって　水上平吉　1
創作　よるがあけた　田辺みゆき　2
創作　クラゲのしるし　世良絹子　11
創作　へんしんだまで　やっつけろ　徳永和子　15
紹介〈切り抜きジャーナル〉「馬でかければ」評（「朝日新聞」六月二五日掲載）　21
イラスト〈絵のページ〉じゅんび体操　久冨正美　22
詩　雨あがりの運動場／白いつぼみ／耳　みずかみかずよ　24
創作　牧野原の神兵　比江島重孝　25
創作　お空のはなし（たなばたさま／にゅうどう雲／みか月さま／まっかな夕焼／にじ／風）　黒崎春夫　35
追悼　悲しみを力に変えて　水上平吉　36
追悼　白仁田宗太氏作品目録　（記名なし）　36
追悼　安らぎは君がうちなる故山にこそ　髙橋さやか　37
随筆　童心について（火の国創刊号より）　白仁田宗太　38
追悼　少年の心・古武士の姿勢　京都志朗　39
追悼　心の友、白仁田さんを悼む　毛利広　40
追悼　最後のハガキ　富永敏治　41
追悼　白仁田さんと　世良絹子　42
追悼　生きつづける白仁田さん　みずかみかずよ　42
紹介　寄贈雑誌（「旗に風」四号ほか一一冊）、執筆者紹介（一二名）　—　43
創作　炭鉱（やま）の子　白仁田宗太　44
創作　音さんと又やんの話　白仁田宗太　50
紹介「私の勧める児童図書」（西日本新聞から）水上平吉、髙橋さやか、加来宣幸　53
紹介　寄贈図書（川村たかし『おてんばショコしゃん』ほか四二冊）　—　54
—　あとがき　水上平吉　—　55
広告「小さい旗」同人の本（みずかみかずよ『少年詩集　馬でかければ』ほか）　—　裏表紙

第五〇号（1978年・新春）
昭和五三年一月八日

冨永敏治、久冨正美、水上平吉、片山美一郎（編集委員）
随筆〈ふぐちょうちん〉子どもの虫歯98％　水上平吉　1
創作　バレンタインデーには　きっと　徳永和子　2
来信（提言）　あまんきみこ　19
来信（提言）　星加輝光　19
詩　金のストロー／満月／秋／秋の風／うたうとき／まわる空／みのむしの行進　みずかみかずよ　20
イラスト〈絵のページ〉雪合戦　久冨正美　22
創作　お客さんはネコ　松尾初美　24
創作　おるすばんさせちゃ、だめ　松本梨江　27
創作　風は・・・　甲木美帆　31
創作　おかあさんが　きたよ　方藤朋子　34
創作　石のにぎりめし　柳田庸子　45
創作〈民話〉ししうち勘三郎　門司秀子　48
創作〈民話〉姫さまと朝月　さかいひろこ　49
紹介　私の勧める児童図書（西日本新聞から）　水上平吉、高橋さやか、加来宣幸　53
紹介　寄贈図書・雑誌（和田登『悲しみの砦』ほか八〇冊）　―　54
―　あとがき　水上平吉　55
広告　「小さい旗」同人の本（みずかみかずよ『少年詩集　馬でかければ』ほか）　―　裏表紙

【注記】

(1) 第一号（創刊号）、第二号の誌名は「小さな旗」。B５版。第九号までガリ版刷り。表紙絵は第一七号まで納富進（第一七号を除き同じ絵（「ハトをだいた少年」）。第一三号・第一六号は絵なし）。

(2) 第四号から季刊となる。

(3) のちのみずかみかずよ。

(4) 目次の漢字表記は「子ガン」となっているが、本文中の表記「小ガン」にならった。

(5) 奥付けに発行月日の記載なし。第一〇号の総目次を参考に記した。

(6) 第一一号から季節表記（春夏秋冬など）が表紙に入る。

(7) 第一二号・第一三号、第一五号～第一七号のみ、判型がB５版からA５版、またはA５変形版に変わった。

(8) 「思想の科学」№27（中央公論社、１９６１・３）の「日本の地下水」欄より転載と記載がある。

(9) 復刊号から久冨正美が表紙絵を担当。以降毎号表紙絵が変わる。

(10) のちの松本梨江。

(11) 第二七号は、長篇一作だけを掲載した。

(12) 「地域の児童文化を育てようという社会的な支援」として（あとがきより）、第三〇号までTNCテレビ西日本の広告が入る。

(13)　一九七五（昭和50）年九月から始まった「西日本新聞」の書評を転載。執筆者は、水上平吉、高橋さやか、加来宣幸の三名。

【付記】

本総目次作成にあたり、第二号〜第七号、第九号、第一〇号、第一六号、第二〇号〜二五号、第二九号〜第三一号については、粟谷さやか氏所蔵の雑誌をお借りして作成しました。ご協力に心よりお礼申し上げます。

寄贈資料　二〇一六（平成28）年度

■櫓山荘模型（1／100）

寄贈者　橋本美代子（橋本多佳子四女）
受入月　二〇一六年六月

櫓山荘は、一九二〇（大正9）年、大阪の実業家・橋本豊次郎とその妻・多佳子の新居として小倉中原に建てられた。一九七五（昭和50）年頃取り壊され、現在跡地が「櫓山荘公園」として整備されている。三階建ての瀟洒な洋風建築で、回遊式庭園や野外劇場、テニスコートもあり、地域の文化サロンとしての役割も担った。一九二二年に櫓山荘で行われた高浜虚子歓迎句会では、杉田久女と多佳子が出会い、多佳子が俳句を始めるきっかけにもなった。

当時の建物の様子は、残された白黒写真で見ることができたが、立体的で彩色のある模型は、櫓山荘とその周囲の様子を分かりやすく伝える初めての資料となる。制作は、橋本美代子氏の指導のもと、北九州COSMOSクラブから図面や資料の提供を受けて行われた。

模型は現在、小倉城庭園内の「杉田久女・橋本多佳子記念室」（二〇一八年一月一六日開室）に展示されている。

■中西輝磨歌集ほか短歌関連資料　五六点（書籍、写真）

寄贈者　中西輝磨（歌人、短歌誌「群炎」代表）
受入月　二〇一六年八月

「群炎」は、一九五三（昭和28）年に歌人の仰木実、浦橋七郎、大迫豊らによって創刊された北九州を代表する短歌雑誌。群炎短歌会発行の歌集「群炎叢書」や、中西輝磨氏の著書などが寄贈された。また、創刊間もない時期からの、歌会や記念大会の様子をおさめた写真資料は、北九州の文化活動の歴史を画像として知ることができる貴重な資料である。

■杉田久女関連の写真フィルム　一一〇七点

寄贈者　杉田重男（杉田久女孫）
受入月　二〇一六年一〇月

杉田重男氏はカメラマンとして活動されており、母親の石昌子（杉田久女長女）が『杉田久女遺墨』『続杉田久女遺墨』などの資料集を刊行する際に、写真撮影を担当された。寄贈資料は、その際の写真資料一式である。フィルムには、久女の肖像写真や俳句、原稿、絵画などの作品が多数収められている。

■児童文学関連資料　三二二点（書籍・冊子、色紙（阿南哲朗、久留島武彦、古村覚、石森延男）、土鈴（阿南哲朗署名入り））

寄贈者　後藤崇（児童文学作家）
受入月　二〇一六年一一月

後藤崇氏は、北九州で活動した児童文学者・阿南哲朗に師事し、童話創作や口演童話活動を行った。寄贈資料は、北九州の児童文学・児童文化関連の書籍や冊子、児童文学者の自筆色紙などである。

■俳句雑誌「自鳴鐘」関連資料　九四点（書画・自筆資料、遺品、書籍）

寄贈者　久野禮子
受入月　二〇一六年一二月

寄贈資料は、横山白虹が主宰した俳句雑誌「自鳴鐘」に関わる資料一式。「自鳴鐘」で活動した故・久野文雄氏の旧蔵品である。

■雑誌・書籍　七点（第二次「明星」第一巻一号～四号、竹久夢二『絵入小唄集　三味線草』、竹久夢二『山へよする』、高浜虚子『みづすまし』※非売品）

寄贈者　青山茂之
受入月　二〇一七年一月

「明星」は、与謝野寛（鉄幹）が設立した「東京新詩社」の機関誌として一九〇〇（明治33）年四月に創刊、晶子をはじめ北原白秋、石川啄木、高村光太郎らが参加した。一九〇八年一一月、一〇〇号をもって一時終刊したが、一九二一（大正10）年一〇月から第二次「明星」が創刊され、寄贈されたものはこの第二次一号～四号までである。与謝野寛・晶子は、九州を五度訪れ、特に一九一七年には若松で講演会や短歌会を行うなどした。

竹久夢二は、一八九九（明治32）年、神戸から八幡（当時の八幡村大字枝光）へ転居し、一九〇一年夏まで住んだ。寄贈書籍は、夢二の挿絵入りの小唄集および歌集である。

高浜虚子には、北九州ゆかりの俳人・杉田久女が深く師事した。久女は、虚子主宰の俳句誌「ホトトギス」の「台所雑詠」欄への出句をきっかけに、俳人としての道を歩み始めた。

■岩下俊作色紙一点、阿南哲朗書簡二点、阿南哲朗書籍二点

寄贈者　後藤崇（児童文学作家）
受入月　二〇一七年三月

寄贈資料は、岩下俊作自筆の色紙、阿南哲朗の書簡および書籍である。旧小倉市生まれの作家・岩下俊作の色紙には、「乱れ打ち／松五郎の肌／汗光る」と揮毫される。後藤氏が晩年の岩下から贈られたもの。阿南哲朗から後藤氏宛ての書簡は、一九七一（昭和46）年一二月、民謡詩碑除幕式のお礼状。

■麻生久資料　一一〇点（原稿、葉書、色紙、書籍、一般雑誌・研究雑誌、同人誌、印刷物、視聴覚、資料ファイル）

寄贈者　麻生壽々代（麻生久長女）
受入月　二〇一七年三月

北九州の詩誌「沙漠」の代表を務めた麻生久の資料。原稿、書簡、書籍、雑誌、資料ファイルなど、麻生の詩人としての活動を知ることができる。また、北九州の同人雑誌活動の研究にも役立つ資料である。

北九州市立文学館紀要　第1号
平成30年3月31日　発行

編集・発行　北九州市立文学館
北九州市小倉北区城内4番1号
電話　093-571-1505

製　　　作　瞬報社写真印刷株式会社

※凡例については、各論考に記しました。
※現在では適切でない表現の見られる資料があります。当時の社会状況を
　理解するため、そのままとしました。ご理解の上、ご了承ください。
※本内容の無断複製、転載等の行為を禁じます。

1709178A